ISSN 2758-5824

異文化

別冊2 学部創設25周年記念特別号

2025

法政大学国際文化学部

異文化

別冊 2　学部創設 25 周年記念特別号

はじめに

国際文化学部長
稲垣　立男

法政大学国際文化学部は、今年度学部創設25周年を迎えることができました。法政大学の長い歴史の中で、国際文化学部は比較的新しい学部といえますが、25年の歳月は、決して短いものではありません。この記念すべき節目にあたり、これまで学部を支え、共に成長してくださったすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。

1999年に創設された本学部は、21世紀の幕開けとともにその歩みをスタートさせました。この四半世紀の間に、さまざまな分野での技術革新や、グローバル化する社会・文化の大きな変化を日々実感してきました。インターネットやSNSが人々のつながりやコミュニケーションのあり方を刷新し、AIやビッグデータが未来の形成に大きな役割を果たす一方で、アメリカ同時多発テロ、リーマンショック、東日本大震災、そして記憶に新しい新型コロナウイルス感染症の拡大、さらに世界各地で起こる戦争や社会の分断など、私たちの世界は数多くの課題に直面してきました。

これらの出来事は、異なる文化や人々への理解を深めることの重要性、そしてコミュニケーションの大切さを再認識させるものとなりました。それに伴い、本学部の果たすべき役割もまた、これらの変化に対応しながら進化してきました。本学部は、多様な価値観や文化背景を持つ人々と協働し、共感と思考力を備えた国際社会人の育成を目指

しています。この理念は国内外で活躍する多くの卒業生に受け継がれ、その成果は私たちの誇りといえるでしょう。

国際文化学部では、学生一人ひとりが主体的に学び、多様な文化や歴史、言語を理解し、新たな時代の課題に向き合う場を提供しています。異なる考え方や視点を尊重し、新しい価値を共に創造する場であり続けています。特に、SA（スタディ・アブロード）での海外留学や一人暮らしの経験は、学生にとって大きな挑戦であり、多くの成長をもたらしたことでしょう。

2024年9月22日には学部創設25周年記念シンポジウムが開催され、各年代の卒業生や教職員が再会する貴重な機会となりました。卒業生の皆さまがさまざまな分野で世界を舞台に挑戦する姿は頼もしく、これからも人生の節目節目でお会いできることを楽しみにしています。この25周年という節目を迎え、私たちはこれまでの成果を振り返るだけでなく、未来に向けた新たな一歩を踏み出す決意を新たにしています。

変化し続ける世界の中で、国際文化学部は未来を担う若者たちが多様性を力に変え、ともに歩む社会を築くための拠点であり続けたいと思います。

目　次

はじめに
稲垣立男
p.3

目次
p.5

第1部　学部創設25周年記念シンポジウム報告
p.11

■国際文化学部のこれまでとこれから
座談会　学部創設時を振り返って
川村湊　持田理子　桐谷多恵子　髙柳俊男
p.13

国際文化学部創設10周年以降の軌跡と将来
松本悟
p.27

SAプログラムについて
渡辺昭太
p.35

目　次

留学生の受け入れとSJ（Study Japan）プログラムについて
髙柳俊男
p.41

海外フィールドスクール
稲垣立男
p.51

「国際文化情報学会」について
林志津江
p.59

■国際文化学部での学び―在校生と卒業生の活躍―

‘Fancy a cuppa?’
吉永優嘉
p.67

SA上海の学び
小西和佳
p.75

SJプログラムでの学びと留学生として
―日本での留学生活について
呂彤琳
p.83

異文化　別冊2　学部創設25周年記念特別号

目　次

海外FS（Field School）成果報告

吉村常葉

P.89

学部生にとっての研究

上山みく

P.97

文化的平和のシンボル：原爆ドーム

―平和希求史（1960年代から2020年代）―

蘓原光

P.105

SAでの経験が卒業後に与える影響について

井上早央梨

P.113

■同窓会活動の紹介およびシンポジウム講評

学部創設25周年を祝して（卒業生を代表して）

木下真吾

P.117

全体講評と国際高校の取り組みに関して

神保マオ

P.125

目　次

学部創設25周年記念シンポジウム　フライヤー
P.129

シンポジウムの様子
P.131

第2部　付録
P.145

国際文化学部のあゆみ（2010年度～2024年度）
P.147

SA先別派遣人数一覧（2010年度～2024年度）
P.150

国際文化学部専任教員一覧（2024年度）
P.153

歴代執行部・事務主任一覧（2010年度～2024年度）
P.156

国際文化学部パンフレット（表紙）
一覧（2010年度～2024年度）
P.157

目　次

国際社会人叢書（表紙）一覧
P.172

おわりに
石森大知
P.174

第1部

学部創設25周年記念シンポジウム報告

座談会　学部創設時を振り返って

パネリスト：
　川村　湊（初代国際文化学部長）
　持田理子（初代国際文化学部 SA 担当職員、現総務部総務課勤務）
　桐谷多恵子（国際文化学部 1 期生、現多摩大学グローバルスタディーズ学部専任講師）
ファシリテーター：髙柳俊男（国際文化学部教授）

髙柳：皆さん、こんにちは。これから学部創設時を振り返って、座談会を行いたいと思います。ファシリテーター役の髙柳俊男と申します。この 3 月末で曽士才先生、あるいは理事や副学長も務めた熊田泰章先生が退任されましたので、学部 47 人の専任教員のうち、私が最長老ということになりました（笑）。私は学部ができるときに法政に来ましたので、まさに学部の歩みと一緒なんです。本当は、その前の第一教養部時代から法政にいらっしゃる森村修先生や鈴木靖先生のほうが古いんですけれども、年齢的には私が上で、しかも今回の記念事業の実行委員でもあるので、司会役を仰せつかりました。

今日は、学部を作ったときの教員と職員、そして 1 期生の、計 3 名の方に当時のお話をいろいろお伺いします。古い方は懐かしいと思うかもしれませんし、先ほどご挨拶をした学部長を含め、新しい方にとっては、自分の知らない時代のことを改めて知る場になるかと思います。単に過去を回顧して、「ああ、そうだった」というのではなく、やはり初心といいますか、原点を振り返ることで、現在を見つめ未来を展望する――そういう場になればいいなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

パネリストの三名：よろしくお願いします。

髙柳：では、最初にご登場いただくのは、初代学部長の川村湊先生です。川村先生は本学で学ばれたわけですし、国際文化学部の母体になった第一教養部（一教）の教員でもあったので、その時代の話を少し伺いたいと思います。一教はどんな感じでしたか。

川村：一教時代のことを話し出すと、止まらなくなると思うので、なるべく抑えて言います。法政には当時、昼間の第一教養部と夜間の第二教養部（二教）があったんですけど、それらが文部省の方針で要らなくなる。すると、一教の先生たちの行き場がなくなるということで、学部が立ち上がる2〜3年前からかなり擦った揉んだしました。その結果、第一教養部は基本的に国際文化学部、第二教養部は人間環境学部という別々の学部として独立しようという話が持ち上がったんですけど、それからが大変でした。

今でも覚えてるのは、第一教養部には当時、100人ぐらいの先生方がいたんですけど、皆さん、新しい学部を作るのはやっぱり苦労だ、面倒くさいと。定年間近で、どうせあと数年しかないんだからという先生もいるし、第一教養部のいわばぬるま湯のようなところにずっといたいという方が結構多かったんですね。あるいは新学部ではなく、既存の法学部・文学部・経営学部などに分属するという方針もありました。そこで、第一教養部の教授会のときに、新学部を作るか、作るまいかで決を採ったんです。そのとき、私はやっぱりこのままじゃしょうがないから、新しい学部を作ったほうがいいんじゃないかと思って、手を挙げたんです。周りを見渡すと、私だけでした（笑）。これが私が国際文化学部の初代学部長になった大きな原因で、「手を挙げたんだから、お前が率先してやるべきだ」と。

私はそれまで、教授会で発言したことはほとんどなかったんです。

柄谷行人さんも一教にいたんですけど、ほとんど発言なさっていません。のちに総長になった田中優子さんもそうですね。柄谷さんが発言するとすれば、野球の話だけで、阪神が勝ったから、あるいは法政の野球部が六大学で優勝したからお祝いをやろうというふうなときだけ、手を挙げて発言した。私は野球のときも何も発言しないで、そのときに1回手を挙げただけで学部長になりました。

そのときは、頭の薄い人が学部長になることはあっても、茶髪の人が学部長になるとは今日の今日まで思っていませんでしたけれども（笑）、順調に学部として成長していったことを非常に嬉しく思っております。長くなるんで、まずはこんなところで。

髙柳：ありがとうございます。法政大学の戦後史については、法学部の飯田泰三先生などによってまとめられた『法政大学と戦後五〇年』（2004年）という、たいへん分厚い本があります。あれなどを見ても、一教からは決して国際文化学部が初めてじゃなくて、文化科学部を設置しようとしてついえたりとか、途中に試行錯誤が何回もあって、最終的には先ほどのお話の通り、1999年に一教から国際文化学部が、そして二教から人間環境学部ができたということになるかと思います。その後のことはまた後でお伺いします。

次に、草創期に学部の職員となった持田理子さんですね。大学を卒業してすぐに法政に来て、しかもSA係になられたことを私もよく覚えています。正直、就職はもう大学職員一本を目指して、ここに来られたんですか。あるいは、配属が国際文化に決まり、中でもSAという新しい業務を担当することになって、どんなお気持ちでしたか。その辺をちょっと伺いたいと思います。

持田：はい、そうですね。最初は大学職員1本というわけでもなかったんですけれども。私自身、島根出身で、島根から東京に出てきて、大学の中ですごく視野を広げてもらったなという印象があったので、これからスタッフとして、学生の方にそういう機会を与えられたらと思いました。大学職員をいろいろ応募して、ご縁あって法政大学に雇っていただくことになったんです。国際文化学部と同じ、1999年の入職です。川村先生からもお話がありましたけれど、新学部を設置するという肝入りの教学改革でできた学部の一つで、目玉である必修のスタディ・アブロードプログラムを担当することになって、本当に驚きました。私自身も留学経験がとくにあったわけではなかったので、戸惑いがあったというのが最初の印象です。

髙柳：ありがとうございます。後でまたその業務のこともお伺いしたいと思います。

次に桐谷多恵子さんです。本学部の一期生ということで、新しい学部に入ってくるのはいろいろ不安があり、また期待もあるということだと思うんですけども、どうして法政の国際文化にされたのか、その辺のことって今でも覚えていますか。

桐谷：はい、とてもよく覚えております。私は法政女子高等学校でしたが、学校の中では代々、法学部が人気でした。私は大学に進むこと自体も少し迷うときがありましたが、法政女子高で受けたリベラルアーツの教育が自分にとってはとても居心地が良かったので、他大学受験などは考えないで、「やっぱり法政に行こう」と決心しました。そのときに新しく国際文化学部ができると聞いて、留学にみんな行けるということで法政女子高では一番人気になったんですよ。ですから、法政女子高から入学するのはすごく大変な枠でした。私も、既存の学部ではどれも満足できない中、平和に関し幅広い視点から学べそ

うな国際文化学部を、飛びつくように希望しました。本当に入ってよかったです。時間があれば、また後でこの学部で学んだこともお話しさせていただければと思っております。

髙栁：皆さん、手短に1周目が終わりましたけれども、引き続き2周目、3周目で少しお伺いしていきたいと思います。

　では、また元に戻って川村先生にお尋ねします。一教の中でいろんなことがあって、最終的には国際文化学部が立ち上がりますが、その中で学部長という大任を果たされたわけです。もう25年も前のことで、忘れたことも多いと思うんですが、学部長時代のことで今でも鮮明に覚えていることがありましたら、少しお話しいただけないでしょうか。

川村：この学部を作るときに、やはり何か目玉みたいなものがなきゃいけないということで、じゃあ「全員が海外に留学するというのはどうだろうか？」、という意見が持ちあがりました。誰が言い出したかは忘れましたけれども、私はそんなことできっこないだろうと思ってました。

　アメリカとか中国とか1カ国1大学に絞って、短期留学するというプログラムは他大学でもあったんですけれども、国際文化学部の場合は、アメリカ、イギリス、オーストラリア、中国、韓国、ロシア、フランス、ドイツ、スペインと、世界中に行かせるわけですね。最初私が学部長をやったときに、学校から携帯電話を持たされまして、「この携帯電話を胸に抱いて寝なさい」、と。当時、携帯はまだそれほど普及していなかったんですけれど、貸与されて、何か事件・事故が起きたら、まず学部長のところに連絡が来て、対処しなければいけない、と。時差があるから、24時間全く寝れないんですね。毎日毎日携帯を24時間胸に抱いていたので、おかげで心臓がちょっと悪くなった

気がします（笑）。幸い夜中に電話がかかってくることはなかったんですけれども、やはり食中毒を起こしたとか、問題が全くなかったわけではないんですね。でも、最初の学生たちも気負ったところがあって、みな無事に済んだと思います。

私は最初、SAについて、「こんなのやれっこない、無理だ」と思って、これをSA設立準備委員会だかに投げて、そこで判断してもらおうと思いました。たぶん「これは無理だ」と、「アメリカ一カ国ぐらいにして、英語から始めましょう」程度で済むかと思ったら、なんと「全部やる！」。24時間やっぱり眠れないのかなと思いました。何かあったら、総長と私が真っ先に駆けつけて対処するということで、当時の清成忠男総長にも「絶対逃げないでくださいね」って言ってスタートしたっていうのがあります。

ですからSAの生みの親は、私ではなくて、その頃SA設立準備委員会の委員長だった熊田さんです。熊田さんがやると言ったんですから、当然、熊田さんの責任だと（笑）。大過なくスタートできた背景には、当時のSA係職員の持田さんと生田眞敏さんの頑張りも大きかったです。

当初、私にはSA先の各大学を訪問する予算までつけてもらったんですけど、それは使いませんでした。自費で、あるいは学会のついでに訪問した大学もありますが、全大学を回るのはやっぱり大変ですよね。代わりに、持田さんや生田さんに何ヶ所か回っていただいたんですよね。

持田：大沢暁SA委員長も回られました。

川村：大沢さんのときは、アメリカから国際電話が来て、学生が1人、何かあったようで、「サクラ」っていうところまで聞こえたところで電話がプッツリ切れました。私は「錯乱したんだ」というふうに解釈

して、何かやったのかなと思ったら、「いや、サクラメントというところで、何か失くした」ということだったので、安心しました（笑）。その1回だけドキッとしました。

それ以降、SA担当の先生方はいろいろ苦労なさっているし、今もたぶん苦労していると思います。時々、SAロシアはいまどうしてるのかな、今年は無理だろうな、とか思ったりしています。それでも今までに大きな事故や故障なく続いてるのは、非常に喜ばしいことだと思っております。

髙栁：どうもありがとうございます。いまSAの話になりましたが、やはり国際文化学部っていうとSAが目玉ですね。全員留学という制度は、法政の国際文化から始まって、その後、例えば早稲田の国際教養学部だとか、立教の異文化コミュニケーション学部にも影響を与えていて、当然大きな意味を持っていると思います。

当時は7言語9カ国11大学だったSA先も、いまはずいぶん変わっています。また、執行部としてSA先に視察に行く話もありましたが、今は予算の都合上、担当教員が行きたくてもなかなか行けない状況にもなっているようです。

当時、SAに関連して、「地球が研究室」という言葉が学部パンフレットやSA紹介ビデオに登場していました。まさに持田さんも、「地球が研究室」という雰囲気の中でSA担当になられて、あちこち行ったり、いろんな苦労もされたと思うんですけど、SAの業務で何か思い出すことはございますか。

持田：はい、そうですね。25年前ですので、留学が今ほど当たり前じゃないときに、当時1学年240〜250名ぐらいの学生を半年間、留学が必須ということで送り出していたわけです。やっぱり日本の中でも初の試みのプログラムで、ビザ申請をはじめ、準備のところからい

ろいろと苦労したことを覚えてます。

UC デイヴィスだったんですけど、ホームステイ先がどこになるか、2〜3 日前までわからなくてというような、やっぱり日本の感覚では仕事がなかなか進んでいきません。そういう中で、桐谷さんをはじめ、1 期生の皆さんと親御さんには、すごくご心配をおかけしたようなところもあります。

あと引率もさせていただきまして、学生とすごく密な関係を持てたことを覚えています。その学生たちがホームステイ先に引き取られていくシーンは、記憶に残っています。そこから留学がスタートするので、「頑張ってね、大丈夫かな？」って心配しながら、ホームステイ先に引き渡していったことをすごくよく覚えています。

髙柳：かなりの SA 先に、引率や視察で行かれましたか。

持田：私は、韓国の延世大学校の視察には髙柳先生と一緒に行かせていただいたと思うんですけど、UC デイヴィスやモナッシュ大にも行きましたね。

髙柳：わかりました。では、一期生の桐谷さんは、SA でどこに行きましたか。

桐谷：私はボストンです。

髙柳：そのときの思い出としては、どんな感じですか。

桐谷：先にお話のあった先生方や事務の方々のご苦労を知らずに、楽しみな気持ちだけでボストンに行きました。ボストン大学での SA は、とても貴重な体験でした。乏しい語学力でいきなり異文化に飛び込ん

だ鮮烈な経験は、今でも昨日のことのように覚えています。ボストン大学は寮だったんですけど、同じ寮生のアメリカ人の青い目の男子学生によく日本語で声をかけられて、「日本語を学んでるんだ」って言われたので、私はもうすっかり舞い上がってしまいました。そのアメリカ人学生との対話で、語学力がすごく上がりました。残念ながらその男子学生はゲイだということで、悲恋のエピソードも生まれました。

髙柳：言いにくい話をどうもありがとうございます。

桐谷：TOEFL の点数はすごく上がったので、実りはあったかと思います。

髙柳：ある意味で、貴重な異文化体験と言えるかもしれませんね(笑)。

桐谷：そうですね。そのときから LGBT のことを身近に学べて、貴重な異文化体験となりました。

髙柳：なるほど！ SA から帰ってくると、当時は一律に 3 年生からゼミですね。ゼミでの活動についても少しお話しいただけますか。

桐谷：私は今泉裕美子先生のゼミに所属しました。今日も「応援団」だといって、ゼミの 1 期生が何人か駆けつけてくれました。あそこにいますね。ありがとうございます。実は私は難病を抱えていて、3 回ほど入院もしてきましたが、ゼミの友人たちが今まで常に支えてきてくれました。ですから、大学時代の友人って宝だなと、心から思います。

今泉先生がとにかく教育熱心でおられたので、ボアソナードタワーの閉館放送が流れる 23 時少し前までゼミをやっておりました。いま

私も大学の教員をやっていますが、「そんな教育できるかな？」って思うと同時に、しなければいけないよねと、自分に言い聞かせています。先生方は本当に教育熱心でした。ここまで学生を思い、学生第一を貫かれた先生方のご指導のお陰で、今の私があると思います。心から感謝申し上げます。「国際文化って何か？」とみんなで話し合って、一緒に作ってきたという思いが強くあります。草創期の学部には、教職員と学生が一体となって、皆で「国際文化学部」を作るんだという気概が満ち溢れていました。

髙柳：やはり新しい学部を立ち上げたときって、教える側も教わる側もある種のパイオニア精神や使命感のようなものがあったと思います。今日も一期生の方がほかにいろいろいらっしゃいますけども、学生と教員のみんなから「会長」と呼ばれた高江遊さんをはじめとして(笑)、ユニークな方が本当に大勢いましたね。

また学部としても、そういった学生たちの自主性や主体性を積極的に支援するということで、学部の「履修の手引き」や学部パンフレットの表紙に学生の作品を使っていましたね。コンテストをやって選ぶなどして、学部の側も学生さんたちと一緒に学部を盛り立てていく雰囲気が、いま以上に強かったように思います。

さて、時間がかなり押していますが、最後にそれぞれの方に、学部創設25周年を迎えたいま、これからの25年あるいは50年を見据えて、何かメッセージをいただいてこの座談会を締めたいと思います。まず川村先生、いかがでしょうか。

川村：はい。この国際文化学部は、最初は国際文化情報学部という名前で作ろうということから始まりました。なぜ「情報」が取れたかというと、文部省の頭の固いお役人から、「『情報』という言葉を入れるのならば、情報の先生をもっと入れて、科目を増やさなければいけな

い」ということを言われて、泣く泣く「情報」を削って、国際文化学部にしました。そういう曲折があったので、私には今でも国際文化情報学部という夢があります。名前はいまさらこのままでいいとも思いますけれども、その時に考えていたのは、「国際」がついた「文化情報学」の学部です。文化情報学って何かというと、ちょっと面倒くさい話になりますけれども、いろんな学問の枠を取り払って、それこそ学際的な研究をして、国際的に活躍する人材を生み出していくということが、そもそもの理念でした。それが完璧に実現されたとはもちろん思っていませんけれども、やはりそういう志向は25年経ってもまだ生きているし、これからますます文化情報学――学際的にいろいろな研究分野を跨ぎながら、専門的なものだけにこだわるのじゃなく、もっと広い目を持って、国際的でもあるし学際的でもある、そういう学部を目指してさらに展開していくものだ、というふうに信じております。

髙柳：ありがとうございます。確かに設置準備当初の段階では、情報の先生は1人だったわけですけど、その後2人から始まって、いまは4人いるんですね。今だったら「国際文化情報学部」が実現できるのかな、などと思ったりもします。

　それでは、持田さん。その後、多摩キャンパスや小金井キャンパスなど、学内のいろんな部署を経験されて、いま総務部にいらっしゃいますね。学内の外側から見て、国際文化学部のこれからに期待することはありますか。

持田：そうですね。25年前から全員留学という非常に先駆的なプログラムを実施されて、だからこそ早稲田等の大学も追随してきて、今の時代があるというふうに思ってます。コロナ禍で、海外との物理的な交流が絶たれるのを経験する中で、やっぱり海外との交流の重要さ

を改めて思いました。

また今、SNS 等で世界が近くなっているようで、一方で分断も生まれているという、非常に難しい混沌とした時代に私たちはいると思います。その中で、さっき川村先生もおっしゃいましたけれども、25 年前から文化情報学というのを立ち上げ、情報リテラシーを備え、異文化を理解すると。それを留学を通して自身の目と自身の体で体験して、うちに戻って、その体験をもとに社会に出ていく人材を育成するというのは、非常に重要な役割を今後も果たすかなというふうに思っております。したがって、今後の国際文化学部にとても期待をしております。

髙栁：ありがとうございます。やがて持田さんが、国際文化学部に直接関連する部署に戻って来る日もあるのかなと、勝手に想像しています。

最後になりましたけど、桐谷さんに、まさに後輩たちに向けて一言いただけますか。先ほど、当時の先生方と比べて「我が身を振り返る」という話もありましたが、学生の目と教員の目を両方お持ちの立場から、今後の国際文化学部に期待することがありましたらお願いします。

桐谷：今こそ国際文化という言葉が、とても大事な時代だと思っています。私は被爆者の孫で、それにまつわる家族親族内の差別が私にとっての出発点で、自分の立場にずっと悩んできました。法政女子高では卒業論文というのがあり、当時私は初めて「私にとっての核問題」について書きました。しかしその卒業論文は公開するつもりではなかったんですね。国際文化学部に進学後、「芸術論」の司修先生にお渡ししたところ、すぐにメールが来ました。「桐谷さん、話したいことがあるので、研究室に来てください」という内容で、恐る恐る行ったら、「これを紀要『異文化』の創刊号に載せたいんだ」と言われまし

た。私はすごく悩みました。最初は「嫌です、これは私の家族のヒストリーで、とても外には出せません」と。しかし、司先生は「桐谷さん、飛び込んでごらん。これはあなたたち家族の問題じゃなくて、世界の問題なんだよ」とおっしゃいました。それを言われた日から、自分の中で何かが始まりました。核をめぐる、私にとっての国際文化学が始まったように思います。

森村先生の講義も涙しながら聞いてましたし、今は亡くなられた大石智良先生の竹内好についての講義は宝です。思い出すと、とても幸せな学生生活でした。司先生をはじめ、熊田先生にも、「次の世代に返せ」とずっと言われてきました。私はまだまだいただいた分の100分の1も返せていないので、これから法政大学の国際文化学部のために、何かやっていきたいなと思っています。国際文化学部創設の理念・目的には、「豊かな文化をもつ平和な世界の構築に貢献できる人材の育成」と謳われています。国際文化学部1期生として、平和な世界の構築のために貢献していきたいと決意しています。

髙柳：最後にとても重く示唆に富むお話を、ありがとうございました。まさにいま3名の方が言われたような内容を踏まえながら、国際文化学部が今後の歩みを着実に続けていけたらと思っています。

今日のこの座談会、あるいはこの後に行われる個別発表をもとにして、学部創設10周年記念時の『異文化』別冊と類似のものを紙媒体で作り、ネット上にも載せる予定です。その際には、またご覧いただけたら幸いです。

大変拙い司会で、時間がオーバーしてしまいましたけど、今日はどうもありがとうございました。とくに川村先生には、北海道から遠路はるばるご足労をおかけしました。三人にどうぞ拍手をよろしくお願いいたします。会場の皆さまも、どうもありがとうございました。

国際文化学部創設 10 周年以降の軌跡と将来

松本　悟

プロフィール：国際文化学部教授。2012 年 4 月法政大学着任。2013〜14 年度教授会主任、2016〜17 年度大学院国際文化研究科長、2021〜22 年度学部長兼大学評議員、2023〜24 年度副学長補佐。法政大学着任前の 25 年間は NHK 記者や NGO 活動に携わった。国際協力学博士（東京大学）。

1. はじめに

国際文化学部は 10 周年記念の 2010 年に、学部紀要の『異文化』別冊を発行し、最初の 10 年間を振り返っています。そこで、ここでは 10 周年以降の国際文化学部の軌跡と、今後の展望についてお話しします。とはいいましても、私が本学に着任した時には、すでに学部創設 13 年を過ぎていましたので、それ以降の 12 年間のお話しになることをご了承下さい。

この間、私は学部執行部を 4 年間、大学院国際文化研究科執行部を 3 年間務めたほか、2012 年度のグローバル人材育成プログラム立ち上げ段階から関わり、全学的な国際インターンシップ・国際ボランティアを通じた学生支援活動の策定と運営に携わりました。学部長を退任した 2023 年度から 2 年間は少子化時代を見据えた「あるべき入試制度検討委員会」の座長、2024 年に入ってからは経済学部の市ヶ谷移転に関連した「多摩キャンパス教学組織将来検討委員」や「経済学部移転準備委員」を務めてきました。本日のお話しは、こうした私自身が直

接関わった学内業務から見た国際文化学部の軌跡と将来の展望であることはお断りしておきたいと思います。

2.　2012年度以降の学部の軌跡

2.1　学部外の要素

学部の軌跡をたどる前に、この間の学部の変化に影響を与えた学部外の要素を簡単に挙げておきたいと思います。

1つ目は「グローバル人材育成推進事業」の登場です。2010年から官邸主導で議論が始まり、2012年度には文部科学省が大学向けの補助金事業を立ち上げました。2014年度から2023年度までは後継の「スーパーグローバル大学創成支援」（SGU）に受け継がれ、法政大学はどちらの補助事業にも採択されました。2つ目は法政大学の財政問題です。2017年度に経営側から示されたもので、その後の人件費見直しや、間接的にはスリム化と呼ばれる開講科目削減の動きに影響を与えました。3つ目は新型コロナウイルス感染症の拡大です。留学を含む海外渡航が難しくなり、オンラインを使った学習スタイルが普及していきました。4つ目は、円安ドル高に象徴される、日本円の相対的な価値の低下と、欧米諸国でのインフレです。

以上のような外部環境の変化の中での、国際文化学部の軌跡をたどりたいと思います。

2.2　グローバル人材育成

国際文化学部は、グルーバル人材育成推進事業とSGUの双方に関わりました。前者では英語以外の諸外国語のブレンド型学習の推進等を、後者ではSAから帰国した3年生以上を対象としたスーパーSA（海外フィールドスクールプログラム）を進めました。海外フィールドスクールでは、表象、環境と文化、開発と文化の3つのコースを立ち上げ、夏休みの10日間前後、教員が学生とともに東南アジア（フィリ

ピン、タイ、ミャンマー、ラオス）のフィールドを訪問し、現地調査や共同プロジェクトを実施しました。詳細につきましては、稲垣先生がご報告されます。

2.3　編入学制度の導入

財政問題解決のため、経営側からは人件費削減の提案が出されましたが、学内での議論の末、この案は凍結されました。その代案のひとつとして提示された「編入学の導入による収容定員の充足と収入確保」を国際文化学部では受け入れることとなり、2024 年度には初めての編入学試験が実施されます。法政大学出身かどうかとは関わりなく、すでに学部を卒業した人を対象とし、合格者には SA を課さずに 3 年次からの編入学を認めるものです。狙いとしては、将来大学院国際文化研究科への進学を考えているような他分野の既卒者に、3 年次からの編入学でその準備をして頂きたいということが含まれています。2020 年代に入って、大学院国際文化研究科と国際文化学部の双方の執行部の定期的な意見交換や合同での教員研究発表会の開催など繋がりが強化されています。

2.4 「スリム化」と国際文化学部

「スリム化」と呼ばれる開講科目削減の方針は、大学の財政問題とは切り離され、市ヶ谷キャンパスの時間割や教室利用に余裕を持たせることで新たな試みをする「スペース」を生み出すことだと総長から説明されています。国際文化学部では、2023 年度から初年次教育のチュートリアルを廃止して、その役割を「国際文化情報学入門」や初年次配当科目等でカバーすることになりましたし、インターンシップ事前学習も実際のインターンシップと直結していないこともあって廃止しました。また、教育効果と事務手続きの煩雑さを天秤にかけ、学部生全員が自らの学びの中心となるコースを選択する「4 コース制」から、4 つ

の分野の科目を比較的まんべんなく履修する「4科目群制」に変更しました。「スリム化」や財政問題とは関係なく、学部事務職員の過重な負担を解消することは学部教授会にとっても重要な課題であることが強く認識されるようになったことも近年の特徴だと言えます。

2.5　SA の変化

コロナ禍で国際文化学部の2年次秋学期必修のSAが何度か中止になりました。詳細は、渡辺先生のご報告に譲りますが、意外なことにSAの中止や、円安に伴うSA費用の高騰にもかかわらず、国際文化学部の志願者数は若干の上下変動はありますが、この12年間3千数百名前後で比較的堅調に推移しています。内向き傾向で日本人留学者数が減少していると言われる中でも、現状では高校生の国際文化学部への関心は比較的高いのではないかという認識を持っています。

一方で、入学者が選択するSA先言語やSA先はこの間変動しています。原因を詳細に分析したわけではありませんが、例えば英語圏であれば留学費用の高さが、諸外国語であれば日本との二国間関係やSA先の文化への関心の高まりなどが影響を与えているように見受けられます。

2.6　外的要因と直結しない変化

以上が学部外の要因と関連付けた振り返りになりますが、それとはあまり関係ないものの12年間の学部の軌跡として特徴的なことをいくつか記録として挙げておきたいと思います。

1つ目が一般入試における独自の諸外国語問題の廃止です。選択する受験生が少ない一方で独自の作問に労力を割かれること、大学入試センター試験（現在の大学入学共通テスト）の外国語で英語以外の科目を選択することが可能なことなどから廃止という決断に至りました。

2つ目が演習や卒業研究の履修者数に対する議論です。12年間の経年変化を追っていないので履修者数の増減について確かなことは言えませんが、現状では演習の履修者は3年生・4年生の6割（秋学期）から7割（春学期）となっています。学部ができた頃とは異なり、演習は必修ではありませんが、学部のカリキュラムマップに記載されているような、2年次までの学習で「ある程度の知識を身に付けた学生が少人数指導の環境の下、みずからの専門性をさらに深める場」に3分の1の学生が参加していないという現状は記録に留めておきたいと思います。また、演習を履修して教員の指導を受けながら卒業研究に取り組むわけですが、卒業研究の登録者はさらに少なく100名程度に留まっています。カリキュラムマップでは「学部での学びの集大成であり、学術的に意味のあるテーマをみずから設定し、自律的な研究を展開しうることを証明するための場」として卒業研究を位置づけています。

3つ目は国際文化情報学会などの学部のイベントの変化です。林先生が詳細にご報告して下さいますが、特に運営方法と表彰のあり方が大きく変わってきました。学生と教員が学会費を払って作っている学会は学部や研究科とは異なる組織体であるにもかかわらず、かなり学部事務に負担をかけて開催してきました。それを教員組織中心に衣替えし、なるべく負担が小さくなるやり方に移行しつつあります。表彰につきましては、人気投票的なやり方から、教員と学生による厳密な審査になったものの、学際的な学部では発表に優劣をつけることが難しいこと、また国際文化情報学会は成果発表会であると同時に教育の場でもあることから、表彰は廃止し、教員が文書で講評を行う方式になっています。それに伴って学会終了後の表彰式兼パーティは廃止となり、また卒業祝賀パーティもコロナ禍以来中止になっています。このように、学生が中心になっていたイベントが開かれなくなっているという現状があります。

3. 国際文化学部の今後をどう考えるか

3.1 学部外の要素

今後の国際文化学部を考えるにあたりまして、先ほどと同じように影響を与えると思われる学部外の要素からお話ししたいと思います。

第一に少子化です。2040年には18歳人口が現在の4分の3に減少し80万人程度になることが見込まれます。大学全体の課題ではありますが、各学部の意見をもとに法政大学の教学のあり方を作っていくという姿勢を大切にするのでしたら、議論の端緒は学部にあるとも言えます。

第二に、海外留学を必修に据えた学部が他大学で増加する一方で、留学費用が円安と海外のインフレで高騰している状況があります。この傾向はさらに進む可能性があると考えられます。

第三に、現在法政大学の多摩キャンパスにある経済学部が2030年をめどに市ヶ谷キャンパスに移転することが組織決定されたことです。国際文化学部生の2倍を遥かに超える経済学部生が市ヶ谷のキャンパスで共に学ぶことになるわけです。9つの学部が学び合う環境の中での国際文化学部のあり方を考えることも重要になると思います。

3.2 学部の将来を考える際の論点

こうした外部環境の変化や、過去12年間の軌跡をもとに、学部の将来を考える大切な時期にあります。言うは易しで、2022年度以降、学部の将来を議論する場が設けられてはいますが、個別の業務や直近の課題がある中で、学部の教員が一緒になって建設的な議論をするのはなかなか難しい状況です。ここでは最も重要だと考えられる2つの論点を挙げたいと思います。

1つ目は費用や学生の精神的な健康も踏まえたいわばSA2.0の検討です。学部志願者数をみる限り、SAの継続は前提になると思いますが、そのうえで、派遣先（国）が今のままでいいかどうか、1学期間

という長さが適切かどうか、SAをある種のレベル分けして多様化してはどうか、などが論点になると思います。

2つ目は専門教育の在り方です。特にカリキュラムツリーの上位に位置する演習や卒業研究のあり方は重要な論点です。近年は、SAの学びを演習に結びつけようと、SA出発前の2年次春学期から演習を履修できるようにしましたが、成果を評価するには至っていません。卒業研究も履修者が学部生の4割程度という状況を善しとするかどうかの議論が必要です。

最後に将来の学部を考えるうえで大切なのは学部25年の蓄積を記録に残して評価することだと思います。もちろん、今回のシンポジウムやそれをもとに制作する『異文化』はそのひとつでしょう。同じように重要なのは「人という蓄積」です。国際文化学部の理念には「国際社会人」の育成が挙げられています。創設から25年が経ち、卒業生の数も6千人を超えています。どういう人間を育てるかという理念に留まらず、この学部で学んだ学生たちはどのような人間になったのか、そこから逆照射して、国際文化（Intercultural Communication）とは何かを再構築していくことが、ここまでお話しした学部の将来を考える際の、貴重な参照軸になるのではないかと考えています。

予定よりもかなり長くなりましたが、ご清聴頂きましてありがとうございました。

SA プログラムについて

渡辺　昭太

プロフィール：国際文化学部准教授。2021 年度～2022 年度、SA 担当教授会主任（SA 主任）を務め、コロナ禍での SA 代替・補完措置の運営や、SA 再開に向けた検討などを行う。

■ はじめに

これから、法政大学国際文化学部のスタディ・アブロード・プログラム（以下 SA または SA プログラムと称します）についてお話ししたいと思います。私は、国際文化学部の渡辺と申します。なぜ私が SA についてお話しするかといいますと、私は 2021 年度と 2022 年度の 2 年間、SA 担当教授会主任（通称：SA 主任）を務めておりました。後ほど詳しくお話ししますが、その時はちょうどコロナ禍で、コロナ禍における SA 運営を担当しておりました。そういった関係もあり、本日は私が SA プログラムについてお話しすることになりました。よろしくお願いいたします。

さて、今日はおおよそ、SA プログラムに関する次のような項目についてお話ししたいと思います。本日ご参加いただいている方の中には、法政大学国際文化学部の SA プログラムについてご存じない方もいらっしゃるかもしれませんので、はじめに SA プログラムの概要についてご紹介します。次に、SA のこれまでの参加者数とサポート体制、それから、SA と他の学部教育との連携についてお話しします。そして、冒頭で少しふれました、コロナ禍における SA 運営について

お話しし、最後に、SAの今後について、私個人の観点からのお話をしたいと思います。

■ SAプログラムの概要について

まず、SAプログラムの概要についてお話しします。国際文化学部では、2年次の秋学期（後期）に、全員がSAプログラムに参加することを義務付けています。ただし、いわゆる留学生やSSI（スポーツ・サイエンス・インスティテュート）という特別なコースに所属している学生を除きます。留学生を対象とした教育プログラムについては、この後、別途発表がありますので、そちらをご覧ください。外国語運用能力を磨き、異文化を理解するためには海外留学を経験することが重要であるという学部の考えにより、全員参加という形をとっています。SA期間中は、SA先国（英語圏の国と、英語以外の言語圏（いわゆる諸外国語圏。6言語（ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、中国語、朝鮮語）がある））の大学（世界10カ国・15大学）に所属し、その国の言語を中心に学ぶことになりますが、現地では言語の学習だけでなく、海外でのキャンパスライフや日常生活を通じて、異文化間の共通点や差異を探る能力を養うことも大きな目的のひとつです。いわゆる文化摩擦やカルチャーショックを肌で感じ、それらに対する理解や問題意識を深めてほしい、そして、こういったSA先での生活体験や学習体験は、学部が目標に掲げている「国際社会人」の養成のための貴重な機会になると学部では考えています。以上が、SAプログラムの概要です。

■ これまでのSA参加人数とサポート体制

次に、SAのこれまでの参加者数とサポート体制についてご紹介します。国際文化学部が創設されたのは1999年ですが、その翌年の2000年に第1回目のSAプログラムが実施されました。それ以降、本

学部が創設25周年を迎えた2024年、つまり今年までに、累計で5681名の学生がSAプログラムに参加しています。その間、様々な事情でSA先大学の変化もありましたが、「英語圏＋諸外国語6言語圏」という大きな枠組みは変わらず維持されており、毎年、いずれかのSA先で学生が学んでいます。また、時期によって人気のSA先も異なりますが、毎年、基本的にはすべてのSA先大学に参加者がおり、その多様性もSAプログラムの大きな特徴になっています。

また、国際文化学部では、グローバル教育センター等、学内の他の関係部局とも協力しつつ、入学直後の1年生の4月の段階から出発直前の時期まで、その時々で必要な各種ガイダンスや事前指導を行うことで、安全にSAを実施できるよう努めています。SA期間中も、専用のポータルサイトを通じた学生からの月例報告の提出や、それに対する教員のフィードバック等の各種のサポートを行っています。一方で、海外経験が初めてという学生や、海外での長期滞在が初めてという学生も多数いますので、現地でカルチャーショックを受け体調を崩したり、現地の生活に慣れるまでに時間がかかったり、その他さまざまな悩みを抱える学生がいることも事実です。しかしながら、先ほど述べたような各種サポートの甲斐もあって、幸いなことに、これまで25年にわたり、大きな事故なくSAを実施することができています。

■ コロナ禍のSA運営とSA代替・補完措置

さて、皆さんもご存じの通り、2020年の初頭から、世界では新型コロナウイルス感染症が蔓延し、日々の生活にも大きな影響が出ました。そして、2020年度は、大学では全面的にオンライン授業が行われました。当然のことながら、SAプログラムもコロナ禍の影響を大きく受けました。学部で検討を重ね、学生の安全を最優先に考えた結果、2020年度および2021年度のSAプログラムは全面的に中止となりました。後に改めて述べますが、SAが段階的に再開したのは、

2022年度になってからです。

2年間にわたるSAの全面中止を受けて、学部では、学生の学びの再構築に少しでも資することができるよう、各種のSAの代替・補完措置を講じました。たとえば、本来はSA先で単位を取得する科目（SA先で受講予定の科目）を学内で臨時開講しました。また、各種の語学検定を利用したSA単位認定制度や、グローバル教育センターが主催する短期語学研修（夏休みや春休みに実施される短期間の語学研修）を利用したSA単位の認定制度などを作り、実施してきました。

その後、2022年には一部のSA先に限りSAを再開しました。再開に当たっては、どのような条件が揃えば安全にSAを実施できるかを学部で検討しました。そして、入国制限の有無、ビザの発給状況、現地の医療体制、感染予防対策などの観点から、SA実施可否判断基準を設け、その基準をすべて満たすSA先に限り、SAを実施しました。2023年度のSAについても、同じくSA実施可否判断基準に照らし合わせて、実施可否を学部で決定しました。幸い、2023年度は、ほぼ全面的にSAを再開することができました。ただし、SAロシアについては、本来であれば2022年度から再開する予定でしたが、ウクライナ情勢に伴い、2022年度及び2023年度は、ロシアでのSAは中止となりました。そして、2023年度から現在まで、その代替措置として、エストニア共和国タリンにおいて、夏期短期ロシア語研修プログラムおよびSAを実施しています。

■ SAとその他の学部教育との有機的連携

さて、これまでSAプログラムについていくつかの観点からお話ししてきましたが、私自身は、SAには2つの性格があると考えています。1つ目は、学生生活前半のゴールとしてのSAプログラムです。国際文化学部の学生は、入学後、約1年半かけて外国語科目や情報科目をはじめとする様々な科目を履修し、現地で生活するために必要な

知識や能力を身に付けていきます。そして、それらを最大限に活用しつつ、異文化の中で約半年間過ごします。つまり、SAプログラムは学生生活前半で身につけたことを実践する場であり、学生生活前半のゴールという意味合いがあります。

2つ目は、学生生活後半のスタートとしてのSAプログラムです。現地で生活している間に、予想外の体験をしたり、意外な人物に出会ったりして、それまでは気づかなかった問題意識が芽生えることがあります。SA後は、ゼミ（演習）や専門科目の履修を通じて考察を深めたり、国際文化情報学会（学部に併設された研究発表の場で、後ほど別途説明があります）で自分の研究成果を発表したり、卒業研究を行って卒業論文を執筆したりと、SAプログラムを通じて得た問題意識を深く探求する場がたくさん用意されています。また、法政大学の派遣留学などを利用して、再度留学に行く学生も毎年一定数います。こういった、SA以外の教育活動を積極的に活用することで、SAでの経験がより生きてくることになります。SAプログラムは国際文化学部の目玉とも言えるプログラムですが、それは4年間（8セメスター）の中のわずか1セメスターに過ぎませんので、他のセメスターとの有機的な連携を図ってこそ、国際文化学部での学びが本当に充実したものとなると考えます。

■ SAの今後について

これまでにお話ししてきたとおり、学部創設以来25年にわたって、SAは大きな役割を果たしてきました。しかし、現在、学部創設から25年を経て、SAを取り巻く状況も大きく変わってきています。たとえば、先ほど述べた、感染症の蔓延や戦争など、安全確保に関わる不安要素が増えたり、SA参加費用が大きく高騰したりといった、学部の努力だけでは解決が難しい問題もあります。こういった問題を、短期的にすべて解決することは非常に難しいと思いますが、学部として

今後のSAの在り方については継続的に考えていく必要があると思います。現在は行われていませんが、以前は短期SAという制度があり、語学学習と情報系の学習に特化した短期間（夏休み期間を利用）のSAを実施していた時期もありました。このような、目的特化型のSAの可能性について、もう一度考えてみるのもありかもしれません。いずれにしても、世界情勢に鑑みつつ、SAの目的や期間など、その在り方を継続的に考えていく必要があると思います。

以上で、SAに関する報告を終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

留学生の受け入れと SJ（Study Japan）プログラムについて

髙柳　俊男

プロフィール：国際文化学部教授。1999 年、学部創設とともに他大学から着任。2001 年度～2002 年度、SA 担当教授会主任（SA 主任）、2008 年度・2010 年度、教授会主任、2013 年度～2014 年度、学部長を歴任。SJ（Study Japan）国内研修の立ち上げと、その後の運営に継続して携わる。

■ はじめに―SJ プログラム導入の経緯

SJ 委員の髙柳です。学部をつくった 25 年前には存在しなかった SJ（Study Japan）プログラムとその歩みについて、これからご説明したいと思います。

1999 年、従来の第一教養部の教員を母体に国際文化学部が創設されたとき、学生全員が留学する SA（Study Abroad）プログラムを、学部の大きな特徴として設定しました。これに参加したくて本学部を志望する受験生は、当時もいまもたくさんいます。

ところが、逆に SA が足枷となって、留学生の受け入れが見送られました。というのは、たとえば中国人留学生が韓国への SA を希望した場合、履修すべき外国語は「英語」「日本語」「朝鮮語」の 3ヶ国語となり、2 外国語履修を前提とする既成制度にそぐわないからです。

全学生が留学に行くのに、学部内に留学生が存在しない変則的な状況の改善に踏み切ったのが、学部創設から 10 年後、曽士才学部長の

時代です。「学部将来構想委員会」で種々議論する中で、「留学生は日本に来ているのがSAなのだから、さらに第三国に出るのではなく、日本国内で研修すべきだ。その研修地は、長野県南部の飯田市が相応しい」、との案が出されました。提案したのは南塚信吾先生で、最終的にSJ（Study Japan）国内研修と命名されました。

ただし、南塚先生は定年間際だったため、プログラムの具体化は同委員会を主宰していた私に任されました。幸い飯田市側への打診で好感触が得られたので、2010年度に曽ゼミ生に協力を求め、また翌2011年度には大学院および他学部に在籍する留学生をモニター役にして、プレ研修を2回実施しました。たまたま2011年度は私がサバティカルだったため、自由な時間の大半をSJ国内研修と事前学習授業のプラン策定に費やしました。

そして2012年、前年に実施した初の留学生入試で入学してきた韓国人留学生3名（すべて女子学生）を参加者として、第1回SJ国内研修が実施されたのです[1]。

■ SJ国内研修制度の実際

では、SJ国内研修が具体的にどのような制度なのかについて、さらにお話ししましょう。

以上のような経緯で始まった研修ですので、その目的は、中山間地域での生活を体験することで、日本を東京のみならず、地方の視点も入れて多面的・複合的に把握することです。

研修地は、長野県の飯田市および下伊那地域ですが、上伊那にも一部足を運んでいます。

時期は夏休みの最後、秋学期が始まる直前で、期間は7泊8日ないし8泊9日です。

対象ですが、留学生入試で入学した留学生は全員参加が原則で、これまでに計55名が参加しました。国籍別では、当初の数年間は韓国

人が多かったのですが、その後、香港や台湾を含めた中国系の学生のほうが主流となり、いまに至っています。

ほかに、SA参加が義務づけられていないスポーツ推薦入学者（SSI所属）や、ビザが取得できないなど、何らかの事情でSA参加が教授会で免除された学生も、留学生と同じ資格でSJに参加できる権利が発生することになっており、その枠で参加した学生が過去に1名います。

SAを経験した一般の学生も参加可能ですが、留学生の場合、個人的な支出以外は経費が基本的に無料なのに対して、全額自己負担となるため、手を上げにくい状況がありました。そこで、実施3年目の2014年、所属学生・院生と教員全員が加盟する国際文化情報学会の予算から、経費の半分弱に相当する「1人4万円」を補助する制度をつくりました。ただし、それを利用してSJ国内研修に参加した一般学生は、あいにく累計で1名のみです。

SJ国内研修に参加する学生は、事前学習授業として開講されている「世界とつながる地域の歴史と文化」を履修することが条件となります。事前学習授業で2単位、現地研修に参加し、後述する地元の方々の前での個人発表を行い、総括レポートを提出すれば2単位、計4単位が付与されます。

引率は専任教員が1名で行いますが、参加学生が5名を上回ると、もう1名増員できることになっています。ほかに、ボランティア補助員を1名つけてもらっています。病気やケガなど、不測の事態が起きた場合、引率教員1人のみではとても手が回りません。ほかに、留学生作成のパワーポイントの日本語をチェックするなど、教員と協力しながら留学生をサポートしてもらっています。このボランティア補助員も参加費は無料ですが、単位はありません。

なお、SAと同様、2020年度と2021年度はコロナのため中止とし、2022年度は希望者のみに対して、5泊6日の短縮バージョンで実施、2023年度から従来の体制に戻しています。通常2年次に参加しますが、

SAと異なり4年次まで参加可能なので、コロナのため参加機会が1回も与えられなかった留学生はいません。

■ SJ国内研修での学び①―事前学習授業

先ほど、SJ国内研修の目的は、地方の視点も入れて日本を多面的・複合的に把握することだ、と述べました。では、SJ国内研修に向けた事前学習授業では、具体的にどんなことを学ぶのでしょうか。全14回に及ぶ事前学習授業の詳細を解説することは時間の関係で無理なので、ここではシラバスの一部を一覧表の形でお示ししておきます[2]。

回数	テーマ	学習内容
第1回	導入	本授業とSJ国内研修の概要説明
第2回	飯田・下伊那の概況①	飯田・下伊那地域にある1市3町10村について、行政区分、地形、気候、交通、物産などの概況をみていく。天竜川の果たした役割や、三遠南信という地域連携の概念ついても考える。
第3回	飯田・下伊那の概況②	飯田市の成り立ちを考える。当初の市域に周辺の15の自治体が合併していまの飯田市が形成されていることの意味、すなわち飯田市の統一性と多様性を具体的に考察する。
第4回	飯田・下伊那の歴史	飯田・下伊那地域が経てきた歴史の概要を通史的に学ぶ。とくに、戦後史において重要な飯田大火、りんご並木、三六災害について知る。
第5回	飯田線建設史①	現在のJR飯田線の建設史を、アイヌの測量士カネトや朝鮮人労働者に焦点を当ててみていく。
第6回	飯田線建設史②	前回のカネトについて、飯田線沿線各地で上演されている合唱劇『カネト』をDVD鑑賞しながら、再度考える。
第7回	満州移民の歴史①	1930年代以降、この地域から多数渡って行った満蒙開拓団や満蒙開拓青少年義勇軍について学ぶ。
第8回	満州移民の歴史②	前回学んだ満蒙開拓青少年義勇軍について、アニメ『蒼い記憶』をDVD鑑賞しながら、再度考える。
第9回	満州移民の歴史③	この地域の人々が、満州移民の結果として生まれたいわゆる中国残留孤児・中国帰国者を、どう後世に伝えようとしているかを、民間における満蒙開拓平和記念館の建設などを例に探る。
第10回	飯田・下伊那の多民族共生の現在	飯田市における外国人の実態や、国際化・多文化共生の取り組みについて考察する。平岡ダム建設における外国人強制労働の歴史を後世に伝えようと努める天龍村の姿勢についても、あわせて考察する。

第11回	飯田・下伊那の文化①	人形浄瑠璃や歌舞伎など、この地域に残る各種の伝統民俗芸能や、それをもとにした現在の文化イベントについて知る。
第12回	飯田・下伊那の文化②	この地域の特色ある文化活動として、70年以上の歴史を誇る郷土雑誌『伊那』の発刊や、活発な公民館活動などについて知る。
第13回	飯田・下伊那の文化③	この地域ゆかりの文化人のうち、法政大学と関わる椋鳩十・西尾実・森田草平の３人について、自校教育の意味も含めて取り上げる。
第14回	まちづくりや自然との共生	早くからグリーンツーリズム、エコツーリズム、都市農村交流などを実践してきた飯田市の取り組みについて知る。山村留学や地域おこし協力隊の活動にも触れる。

研修にとって、事前学習は決定的に重要だと考えています。それがないと、単なる物見遊山や表面的な観察にとどまり、その地域のもつ本質的な性格や魅力・課題に迫ることはできません。総授業コマ数が厳しく制限されている現状にもかかわらず、SJ国内研修の開始と同時に事前学習授業を立ち上げることができたのは、研修担当者としては大変ありがたいことと感謝しています。

■ SJ国内研修での学び②―現地での見聞・交流

以上の事前学習授業を踏まえて、現地研修が行われます。現地では見学・体験・交流がメインで、主要テーマは学部のコンセプトに則って「国際」と「文化」です。すなわち、

①国際関係や多民族共生：とくに「負の過去」（満州移民、外国人の強制労働ほか）からどう学び、未来に伝えようとしているか？

②文化・教育活動：伝統文化を大切にしつつ、同時に新しい文化の創造にどうつなげているか？

③自然との共生や都市農村交流：自然豊かなこの地を残していくために、どんな取組みが行われているか？

などがポイントとなるでしょう。

具体的には、年によって若干異なりますが、たとえば以下のような内容を実施しています。

飯田市立図書館利用（郷土資料がきわめて充実）／川本喜八郎人形美術館見学／飯田市美術博物館利用（地域に関するプラネタリウムのオリジナル映像視聴も）／飯田市平和祈念館見学／満蒙開拓平和記念館訪問（関係者との懇親会も）／熊谷元一写真童画館見学／外国人向け日本語教室「Hand in Hand 和楽」参加／平岡ダムとその犠牲者追悼碑見学／限界集落や過疎の小学校との交流／地域活性化を目的に開設されたゲストハウス宿泊／飯田風越高校国際教養科生徒との交流／飯田市公民館での個人ごとの成果発表

こう列挙してもわかりづらいので、写真でお示ししましょう。【次頁】

研修参加者たちは、事前学習授業を受講する中で自分のテーマを選び、学期末の課題として「研修計画書」を作成します。以上のような現地での見学・交流や、計 2 日間の自由行動日における個人的な訪問や調査を経て、高校生や現地住民の前で個人報告をします。歴代の留学生たちが取り上げたテーマから、いくつか列挙しておきましょう。

満蒙開拓／満蒙開拓平和記念館の設立／平岡ダムの外国人強制労働／飯田市と朝鮮の文化交流／飯田市のまちづくり／飯田市の公民館活動／飯田市内の交通／飯田市の焼肉文化／伊那谷の人形劇／菱田春草の朦朧体と韓国近代東洋画／下條村の少子化対策／山村留学／リニア中央新幹線

■ SJ 国内研修に参加した留学生の感想から

では、こうした SJ 国内研修に参加した留学生は、その経験をどう受け止めているでしょうか？　この後、第 2 部でお話ししてくれる呂彤琳さんの報告が非常によくまとまっていますので、そちらをぜひ参照してほしいのですが、ここでもいくつか紹介しておきます。

売木小学校の児童たちとの交流

満蒙開拓平和記念館のメンバーたちと

阿南町和合で地元民と五平餅を作る

飯田風越高校の生徒たちとの交流

飯田市公民館での成果発表会

地元に暮らす本学卒業生たちと

・「最初はどうして奈良・京都や沖縄じゃないのかと残念だったが、行ってよかった。自分からでは決して行かない場所を体験できて、日本を見る目が変わった。」

・「平岡ダムにおける外国人強制労働の歴史と向き合う天龍村の施策を知り、『負の歴史』を語り続ける村の姿勢にむしろ感動した。」

「中国も天安門事件に対して同様の態度をとってほしい。」（中国系学生）

・「歴史は恨みを深めるために学ぶものではない。忘れないことが大切。」（韓国人学生）

また、自国の学歴社会やそのための熾烈な受験競争に疑問を抱き、自律的な学びがあると思われる山村留学を個人テーマに選んだ韓国人もいました。外からやってきて地域のために献身的に働く地域おこし協力隊隊員の生き方に惹かれ、ゼミで地域おこし協力隊を研究テーマに選んだ例もあります。

そうしてみると当初、研修の目的とした日本への多面的な認識のみならず、自国への相対的・多元的な認識や、普遍的な価値の醸成にも役立っているのかもしれません。一方では、留学生の好意的な感想が、「ここには何もない、早く出たい」と否定的に捉えていた地元の高校生たちに、自信や誇りを与える効果も生んでいるようです。

■ SJ国内研修の今後に向けて

さて、以上が、これまで計14回実施したSJ国内研修の概要です。留学生に「東京＝日本」ではない、より多面的な日本像を形づくってもらうという当初の目的は、ほぼ達していると言って差し支えないでしょう。また、留学生が自国を相対的・多元的に認識したり、普遍的な価値を醸成する上でも貢献するという、当初は想定していなかった成果を生んでいるとも言えそうです。

とはいえ、SJ国内研修の課題も、また各種存在するように思います。当初の構想では、留学生と同数の日本人学生（一般学生）に参加してもらい、研修の中で双方が協働ないし切磋琢磨することを通じて、ともに課題解決に当たるような形をイメージしていました。しかし、一般学生の参加者がこの14年間で1名のみですので、この構想はまったく実現できていません。

また、SJ 国内研修の全体的なあり方をめぐっても、再考する時期に差しかかっていると言えるかもしれません。折しも、いま留学生受入支援委員会では、希望する留学生に SA 参加への道を開いたり、SJ 実施地を複数化し、現行のいわば短期 SJ に対して長期 SJ を設ける案も、検討が進んでいると聞いています。

私の法政大学における任期も最長であと 2 年余りですので、担当者の交代とともに、制度を大幅に見直していいのかもしれません。いずれにしても、SA と同様、SJ 国内研修が国際文化学部の特色ある教育の一つとして、今後とも大いに発展していくよう願っています。

これで、SJ 国内研修に関する私の報告を終わりにしたいと思います。ご清聴、どうもありがとうございました。

注

1 SJ 国内研修実施の経緯や方針決定後の準備作業について、より詳しくは、髙柳俊男「留学生を主対象とする国内研修実現への歩み―法政大学国際文化学部の教育実践の記録として」（熊田泰章編『国際文化研究への道：共生と連帯を求めて』彩流社、2013 年、所収）をご参照ください。

2 事前学習授業の詳細、すなわち各回の授業で何をどう学ぶかについては、髙柳俊男「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために―国際系学部の事前学習授業の実際から」（飯田市を舞台とする大学連携組織「学輪 IIDA」の機関誌『学輪』第 2 号、2016 年、所収）にまとめてあります。本学図書館および学部資料室で閲覧できます。

海外フィールドスクール

稲垣　立男

プロフィール：国際文化学部教授。2023 年度より国際文化学部学部長を務める。アーティストとして、フィールドワークを通じた作品制作や美術教育に関する実践と研究に取り組む。さらに、コンテンポラリーダンスの分野でも活動している。

■ はじめに

海外フィールドスクールは、法政大学国際文化学部で開講されている専門科目であり、大学や学部での多様な学び、SA（スタディ・アブロード）や SJ（スタディ・ジャパン）による国内外での留学経験を活かしながら、海外の現場でより高度な専門知識、研究手法、表現技術を習得することを目的として、2017 年度に設置されました。

このプログラムは、「開発と文化コース」「環境と文化コース」「表象文化コース」の 3 つのコースで構成されており、それぞれ東アジアおよび東南アジアをフィールドワークの対象としています。プログラムは、1 週間から 10 日程度の海外研修と、日本国内での事前・事後研修から成り立っており、地球規模の課題について深く考察することを通じて、問題発見・解決能力や異文化の中での表現力を育成することを目指します。参加者は、日本とは異なる環境の中で、多文化間の調査・実習・創作活動を進め、持続可能な社会の構築に貢献できる人材となることを目指します。

本稿では、海外フィールドスクールの各コースのうち、筆者が担当

する「表象文化コース」について述べます。

■ 表象文化コース

海外フィールドスクール表象文化コースは、文化と芸術全般をテーマとし、人々との共同作業を通じて、多角的な視点や文化理解、そしてコミュニケーションを体験的に学ぶことを目的としています。このコースの最初の授業は、2017年にタイ王国のチェンマイとパヤオで実施されました。チェンマイでは、アーティスト・イン・レジデンス施設「Compeung」に滞在し、近隣の保育園でのワークショップや寺院の僧侶との共同作業、またパヤオ市にあるパヤオ大学芸術学部の学生と共同で映像制作を行いました。2020年以降、このコースの活動拠点はフィリピンに移りました。

タイやフィリピンは、筆者が20代後半からアーティストとして活動を行っていた場所でもあります。筆者は1993年にタイ・チェンマイで開催された国際展「Chiang Mai Social Installation」に参加、2007年以降

図1　パヤオ大学芸術学部校舎前で、同大学の学生と教員と共に。
最初の海外フィールドスクール表象文化コースは、2017年にチェンマイとパヤオで開催された。パヤオ大学芸術学部では大学生とコラボレーションで映像制作を行なった。

に複数回、アーティスト・イン・レジデンス施設の「Compeung」に滞在し、またゼミの学生と近隣コミュニティとの共同制作に取り組んできました。フィリピンについては、1992年にネグロス島バコロド市で開催された国際展「VIVA EXCON 1992 Bacolod」（Visayas Islands Visual Arts Exhibition and Conference）への参加をきっかけに、地元のアーティストとの交流をスタートさせました。この交流は現在に至るまで継続しています。

■ コロナ禍の海外フィールドスクール

2020〜2022年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、国際文化学部の留学プログラムはすべて中止されました。2020年度には、表象文化コースがマニラおよびネグロス島バコロド市への渡航を予定していましたが、他の留学プログラムと同様に中止となりました。2021年度も感染拡大が収まらない状況が続く中、この機会を活用してオンライン授業に実験的に取り組みました。フィリピンのマニラやバギオに在住する芸術文化関係者に協力を依頼し、フィリピンと日本をオンラインで結ぶ授業を開講しました。

オンライン授業では、フィリピンの政治と社会、インディペンデント映画、現代アートに関する講義のほか、現代アートと演劇に関するワークショップを実施しました。すべての講義とワークショップは、学生が自宅からZoomを利用して受講する形式で行われました。

2022年度もプログラムは国内で実施されましたが、前半の講義は2021年度と同様のテーマでZoomを活用してオンラインで実施しました。一方、ワークショップは対面授業が可能となった市ヶ谷キャンパスで行われました。市ヶ谷キャンパスとフィリピンをオンラインで結びながら、現代アートと演劇に関するワークショップを対面形式で開催しました。

図２　（左）Zoomによる講義　図３（右）市ヶ谷キャンパスでのワークショップ。2022年度は、オンラインでフィリピンと日本を結び、オンライン講義と対面によるワークショップを実施。

■ 2024年の海外フィールドスクール

2024年度は、表象文化コースが開講されました。このコースは、コロナ禍以降初めて海外渡航を伴うプログラムとして実施されました。プログラムは、コロナ禍で培ったオンライン授業のノウハウを活かした配信型授業と、現地で行うフィールドワークで構成されています。

海外渡航に関しては、円安などの影響もあり、通常よりやや短い5泊6日の滞在となり、渡航先は日本から直行便でアクセス可能なマニラのみとしました。参加者は国際文化学部の3年生2名、4年生4名、社会学部の4年生1名の合計7名です。スケジュールは、6月に事前ミーティングと渡航準備、7月に事前学習とオンライン講義、8月にフィリピンへの渡航および事後学習という流れで進められました。

8月に実施されたマニラでのフィールドワークのテーマは「インターベンション（介入）」でした。マニラの街や文化施設を巡りながら、都市に介入するアートワークの方法を探求しました。本プログラムの目的は、講義やフィールドワークを通じて東南アジア、とりわけフィリピンにおける環境問題や社会問題と、美術、演劇、映画といった文化活動を関連づけて考察することです。

学生たちはマニラ滞在中に「インターベンション」をテーマとした

図４　マカティ・シネマスクエア（マカティ市）にあるUnderground Galleryで開催されていた現代アートの展覧会を見学。

作品を制作しました[1]。制作された作品は記録としてまとめられ、マニラ滞在中の活動記録[2]とともに、帰国後にレポートとして提出されました。

マニラのアート・コレクティヴ「Load na Dito Projects」[3]の共同設立者で、フィリピン在住のキュレーター、リサーチャーの平野真弓氏と、フィリピンを代表するアーティストのマーク・サルバトス氏にフィールドワーク全体の監修をお願いすることでき、アーティストへのインタビューや美術関係者とのディスカッションの機会が多く設けられ、マニラの文化や芸術を支える人々についての理解を深める貴重な体験となりました。

1　制作した各作品のタイトル：「他言語による会話」「チョコと情報の交換：都市と人との接点」「コインネクション」「スマイルメーカー・ユリ」「触（ふれる）」「マニラのストリートへの介入の記録」「言葉の痕跡」「フィリピンで過ごせば」

2　各レポートのタイトル：「フィリピンにおけるアーティストの活動環境」「フィリピンにおける華僑の役割」「私がこの海外フィールドスクールでの作品制作でテーマとしたのはお金である」「視線」「フィリピンの文化施設における資料保存の課題と今後の展望」「フィリピンにおける社会とアートの結びつき」「マニラにおけるチャバカノ語についての調査記録」「自由気ままに」

3　Load na Dito Projects　https://loadnaditoprojects.cargo.site/（参照 2024-11-28）

表1．オンライン講義（2024年7月1日–7月31日、8月10日）

日時	内容	講師
7月1日（月）	事前学習 渡航前の学習の準備	稲垣立男（本学部教授）
7月8日（月）	ドゥテルテ前政権とマルコス現政権の政策の変遷について	澤田公伸（まにら新聞記者）
7月15日（月）	フィリピンの社会と映画における表象	鈴木勉（国際交流基金マニラ日本文化センター所長）
7月22日（月）	フィリピンでのアーティストとしての活動・ギャラリーを中心としたアートシーン	山形敦子（マニラで活動する日本人アーティスト）
7月29日（月）	マニラのストリートとアート（仮）	平野真弓（インディペンデント・リサーチャー、キュレーター）
8月10日（土）	事後学習 渡航後のまとめの講義	稲垣立男（本学部教授）

表2　マニラでのフィールドワーク（2024年8月3日–8月8日）

日時	訪問先	都市
8月3日（土）	成田空港–ニノイ・アキノ空港	
8月4日（日）	フィリピン国立美術館、国立自然史博物館	メトロ・マニラ
8月5日（月）	イントラムロス、マニラ大聖堂、エスコルタ・ビノント、98B Collaboratory	マニラ市
8月6日（火）	Purita Kalaw-Ledesma Center、Underground Gallery、国際交流基金マニラオフィス、The O-home	マカティ市
8月7日（水）	ヴァルガス美術館、Parolaアートギャラリー（フィリピン大学ディリマン校）、アテネオアートギャラリー（アテネオ大学）	ケソン市
8月8日（木）	ニノイ・アキノ空港–成田空港	

■ 今後の検討

2017年度に始まった海外フィールドスクールですが、2020年に発生した新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、2021〜2022年度にはオンラインによる留学プログラムが手探りで実施されました。この経験は、遠隔授業を活用するための重要なヒントとなりました。海外留学は費用面で為替レートの変動による影響を受けやすいため、プログラム内容を精査した上で積極的にオンライン授業を併用することが、安定した留学プログラムの運営につながると考えられます。

社会的課題と文化や芸術の分野を結びつけることをテーマとした海外フィールドスクール表象文化コースは、学生一人ひとりが芸術を通じて社会のあり方を深く考察し、自らの言葉で表現するきっかけを提供するでしょう。今後も、自由で広がりのあるプログラム作りを継続していくことが求められます。

■ 関連リンク

ComPeung　https://www.compeung.org（参照2024-11-28）
パヤオ大学芸術学部　https://safa.up.ac.th/main/（参照2024-11-28）
国際交流基金マニラ支局　https://jfmo.org.ph（参照2024-11-28）
まにら新聞　https://www.manila-shimbun.com（参照2024-11-28）
ロード・ナ・ディト　https://loadnaditoprojects.cargo.site（参照2024-11-28）
山形敦子　https://atsukoyamagata.com（参照2024-11-28）
フィリピン文化センター　https://culturalcenter.gov.ph/#home（参照2024-11-28）
フィリピン国立美術館　https://www.nationalmuseum.gov.ph/our-museums/national-museum-of-fine-arts/（参照2024-11-28）
国立自然史博物館　https://www.nationalmuseum.gov.ph/our-museums/national-museum-of-natural-history/（参照2024-11-28）
イントラムロス　https://intramuros.gov.ph（参照2024-11-28）
98B Collaboratory　https://www.98-b.org/https://www.instagram.com/98bcollaboratory/ https://www.facebook.com/98Bcollaboratory（参照2024-11-28）
Purita Kalaw-Ledesma Center　https://www.tatlerasia.com/lifestyle/arts/purita-kalaw-

ledesma-the-woman-who-changed-the-history-of-philippine-art（参照 2024-11-28）
Underground Gallery　https://www.facebook.com/pages/Underground-Gallery/240008656865960（参照 2024-11-28）
The O Home　https://www.facebook.com/profile.php?id=61550191292254（参 照 2024-11-28）
フィリピン大学ディリマン校　https://upd.edu.ph（参照 2024-11-28）
UP Vargas Museum　https://vargasmuseum.wordpress.com/?fbclid=IwY2xjawEryYBleHRuA2FlbQIxMAABHebXaijwUleF9nkzRnQHvjWVg-zYlTBvWdFmxl6ObNiJX3zcfw9a1P5YqQ_aem_13CpQqbtOptexCNbzHZrcA（参照 2024-11-28）
Parola UP Fine Arts Gallery　https://cfa.upd.edu.ph/cfa-life/gallery/（参照 2024-11-28）
アテネオ大学　https://www.ateneo.edu/（参照 2024-11-28）
Ateneo Art Gallery　https://ateneoartgallery.comhttps://www.facebook.com/ateneoartgalleryhttps://www.instagram.com/ateneoartgallery/?hl=en（参照 2024-11-28）

「国際文化情報学会」について

林　志津江

プロフィール：国際文化学部教授。2020〜2021 年度に企画・広報委員会委員長として、コロナ禍の「国際文化情報学会」の運営責任者を務める。

国際文化学部の林と申します。私が本学国際文化学部に着任したのは 2016 年 4 月です。本学の卒業生というわけでもなく、我ながら国際文化学部の今昔を語る「25 周年記念シンポジウム」に登壇するにはいささか心許ない気がしないでもありません。そんな私がここで標題の「国際文化情報学会」についてお話しするお役目を授かったのは、私がコロナ禍の 2020〜2021 年度、本学部の「企画・広報委員会」委員長の職にあったからです。

国際文化学部の「企画・広報委員会」には、大きく分けて 3 つの仕事があります。一つは紀要『異文化』の編集、次に「FIC オープンセミナー」の管轄、もう一つが「国際文化情報学会」（以下「学会」）と称する学部内学会と、それが毎年 11 月下旬〜12 月上旬に開催している総会と学会大会の運営です。コロナ禍の 2020〜2021 年度、国際文化学部は授業や SA とはまた別の、「企画・広報委員会」の音頭による二つの「オンライン」を経験することになりました。一つは『異文化』の完全オンライン化（紙媒体の廃止の決定）、もう一つは「オンライン学会」です。

手前味噌な言い方に聞こえてしまいそうなのは本意ではありません

が、この間の「企画・広報委員会」の業務には凄まじい時間と労力がかかりました。私は昨年度（2023 年）、やはり本学部の「研究倫理委員会」委員長を務めましたが、2023 年度は学部生の「研究倫理審査」実行初年度だったことから、一年を通じて想定外の事態に見舞われ、同じ国際文化学部の先生からはたびたび「大変なお仕事ですね」「大丈夫ですか」と労わっていただきました。国際文化学部にはこのように優しく気遣ってくださる先生が数多くおられ、それは私たち皆の誇りであるわけですが、しかし私が昨年に感じていた本音は、不遜にも「私そんなに大変に見えてるのかな、あの時の企画・広報委員会に比べたら全然大したことないんだけど」といったところで、コロナ禍の日々を思い出しては「まだまだ大丈夫」とのんびり構えていた次第です。ともあれどちらの委員業務についても、この場を借りて、優しくお声がけをくださった全ての皆様に改めて感謝申し上げる次第です。本当にありがとうございます。

ここからはコロナ禍での「企画・広報委員会」の業務とそこで行った変革について、2020 年度の流れを振り返りながらご説明します。2020 年 4 月、私は SA 委員として SA ドイツの担当者であっただけでなく、市ヶ谷キャンパスの ILAC が運営するさまざまなドイツ語関連授業の科目責任者でもあったことから、ここにおいでの多くの先生方と同様、いわゆるオンライン授業のことで頭がいっぱいでした。ですがその年の 5 月末ごろでしょうか、当時の学務部事務・国際文化学部ご担当職員の本田裕人氏から「学会（大会）、どうしますか」とお声がけをいただき、私はそこで初めて自分が企画・広報委員会の委員長であることを思い出すに至りました。それと同時に私が知ったのは、毎年 11 月に開催している学会大会の運営が、常に 7 月教授会での「実施要項」を上程・承認を経てスタートするという事実です。つまり 2020 年度の学会は、2020 年の 5 月という余裕のあるタイミングで、「SA が中止となった今、今年の学会はどうするんだろう？」と思い至ってく

ださった学部事務職員の皆さんが、私にご連絡くださったことで始めることができたといっても過言ではありません。おかげで7月上旬には当時の学部執行部からオンライン開催の意向を確認し、2020年度の企画・広報委員会は、学会大会の「実施要項」の第一弾を無事に7月教授会（2020年度第4回教授会）に上程することができました。教授会では実施要項の内容が大筋認められ、2020年度の学会大会がオンライン開催（9月教授会で大学院生の「学会」発表をZoomで、他は全てオンデマンド型）となることが決定しました。「実施要項」第1弾が学部HP（法政大学HP）上に公開されたのは、一斉休業前の8月11日のことです。

2020年度の「実施要項」案を作成する最中、企画・広報委員会は、オンラインゆえ想定される問題に向かい合うことになりました。その一つは学生の参与を前提とする学会運営についてです。2019年度まで、学会大会は教員と学生双方が全4部門（「A：論文（学部生／大学院生）」「B：ポスター」「C：映像」「D：インスタレーション・パフォーマンス」）いずれかの部門でエントリーして行われる「発表」を10点満点で審査し、複数の審査員が行う審査平均値の得点で、各部門上位3名（3組）を表彰する制度になっていました。また学会大会終了後の同日夕刻には懇親会と表彰式が行われ、表彰される上位3組には学会費から賞金も渡されていました。審査や賞金という制度は2004年度ごろから学生の積極的な参加をうながす目的で導入されてきたとのことでしたが、コロナ禍で賞金の使い道は定かではありません。また2019年度の段階で、学生審査は審査員の無断欠席などの機能不全が表面化していました。コロナ禍でただでさえ人の往来がスムーズにいかない状況の中、学生審査のスムーズな進行は期待できないかもしれません。よって2020年度の企画・広報委員会は、喧喧諤諤の議論を経て、先の7月教授会に上程した「実施要項」で、教員による審査と表彰制度は残したまま、学生審査と賞金の廃止を提案し、

先の 7 月教授会ではその内容が認められることになります。ちなみに 2020 年度は、教員による審査と表彰制度を維持していたのですが、2021 年度の「実施要項」ではその 2 つも廃止し、2024 年度現在に至るまで、参加者には学部教授会メンバー（学会構成員の中の国際文化学部所属教員）による「講評」が渡されています。

さらに 2020 年度の「学会」を機に多くの学部教授会メンバーが確認することになったのは、国際文化学部事務と「学会」との関係です。周知の通り、「学会」構成員は学部ないし研究科に所属する教員と双方に所属する学生であり、また学会とはその構成員による自主運営組織であるはずです。しかし国際文化学部の創設以来、国際文化学部事務の方々は、学会大会業務の多くを担ってきてくださっていたわけです。恥ずかしながら私は、「大学の校舎・教室を使用して、すなわち対面の学会開催・運営ができない」状況に遭遇して初めて、学部事務の善意に学会大会運営の多くが支えられてきたこと、究極のところ学部事務の方々のサポートがなければ今後も到底運営不可能であろうこと、そのことにこれまで少なくとも自分が思い至ることのできなかった事実に愕然としました。ともかくも当時の企画・広報委員会は、2020 年 7 月、学部事務に多大な負担を強いてきた従来の方法から脱すべく、2020・21 年度を移行期間として、学会業務を外部に委託する方針とその必要性を、「実施要項」とあわせて確認することになりました。

他方、コロナ禍を経て通常運行に戻った今も、本学会は 2020 年度以降、継続してインターネット上の国際文化情報学会専用ウェブサイトを利用しています。このウェブサイトは、企画・広報委員会を長く務めてこられた森村先生のイニシアチブで、2019 年度までに仮設置が完了していたものです。当然ながら 2020 年度の「オンライン学会」実現の背景には、このウェブサイトの存在がありました。そしてこの学会ウェブサイトの設計を担当くださっていたのが（株）エイチ・ユー

さんで、2020 年 8 月には学部事務の 3 名（当時の萩尾亮介主任、本田裕人氏、高野有紀氏の 3 人）と、（株）エイチ・ユーさんの側でこの設計をご担当くださった永田貴寛氏です。学会専用 HP は学会活動を web 上に移行させることによる活性化を目的としていたはずですが、期せずして 2019 年というタイミングで仮設置までが完了していたことで、コロナ禍による「オンライン」、ひいてはオンデマンド型を中心とする学会大会にも大いに役立つことになりました。

こうして 2020 年度、企画・広報委員会の面々は怒涛の日々を送ることになりました。とりわけ 2020 年 9 月から 11 月の間、企画・広報委員会のメンバー内はもちろん委員会と学部執行部、委員会と国際文化学部職員の皆さん、あるいは委員会と学部事務職員さんと（株）エイチ・ユーさんとの間で、数しれぬ数のメールや Zoom による打ち合わせが行われたのはいうまでもありません。2020 年度は現在も年度ごと更新して委員会内で使用されている「企画・広報委員会メーリングリスト」が作られた初年度に当たります。

さらにもう一つ重要なのは、本学大学院国際文化研究科にとって「学会」が意味するものについてです。私はそれ以前に企画・広報委員を務めたことがなく、しかも国際文化研究科の職務を担当していません。ですが国際文化研究科の大学院生にとって毎年 11 月末〜12 月に開催される「学会」での「論文（大学院生）」部門にエントリーして行う研究発表会は非常に重要なもので、例えば博士前期課程の研究科に所属する学生は、前期課程の間に一度はここで発表をしないと修士論文を提出できません。そのようなわけで、国際文化学部の組織である企画・広報委員会は、とりわけコロナ禍の「オンライン」開催に際し、国際文化研究科とも密に連携を進める必要を認めるに至りました。実際に 2020 年 10 月ごろから、当時の国際文化研究科長の輿石先生とはほとんどの情報を随時共有することになりました。その経験もあって現在の企画・広報委員会は、4 人の委員会メンバーのうちの一

人を国際文化研究科長にする、ないしは国際文化研究科の執行部経験者をそこにあてがうよう考慮しています。

忙しさのピークは2020年12月3日（金）から4日（土）にかけてだったでしょうか。12月3日（金）の晩、出来上がったはずの審査分担をやり直すことになったため、私は3日（金）の晩から「学会」オンラインサイトがアクセス開始となり、Zoom上の総会が始まる4日（土）の13時まで、一睡もすることがありませんでした。また委員会のメンバーは、オンライン開催による会期最終日である2020年12月12日（金）の午前中までに全て審査の集計を終え、翌12月13日（土）のZoomによる「表彰式」の実施に間に合わせることができました。そしてこの間、私はまたしても少なくない国際文化学部教授会の先生方から、恐れ多いことに電話やメールを通じてたくさんの励ましや感謝のお言葉をいただきました。このことは本当に感謝してもしきれないという感じで、本当に支えられました。繰り返しになりますが、私はそれ以前に企画・広報委員の職を務めたことがなく、初体験の委員でいきなり委員長を担うことになったわけですが、曲がりなりにもそのようなタイミングで「オンライン」大会を実現できたのは、まず当時の委員会のメンバーでおられた岡村先生、長年にわたって企画・広報委員会で会計を務めてこられた鈴木正道先生、同じくこの委員会を何年もご経験されてきた森村先生のお仕事はもちろんのこと、常にきめ細かく配慮の行き届いた学部事務の皆さんのお力添えがなければ、完走することはできませんでした。また私は2020年度の翌年、2021年度も引き続き、企画・広報委員会の委員長を務めることになり、それは2021年〜2022年度の学部執行部のご判断によるものですが、2021年度も引き続き私が委員長として業務を継続したことで、2020年度のコロナ禍と「オンライン」をきっかけに始まった諸改革をある程度まとまった形で残すことができたかもしれません。本稿で最初に少し触れた『異文化』紙媒体の廃止についても、最初のきっかけは「残部

を置いておく場所がない」という都心の大学ならではの悩みではありましたが、デジタル化への移行は時代の必然でもあろうことから、本学会は2020年度の「オンライン学会」を改革の機運にすることができたように思われます。

こうして2020年度の学会大会はなんとか無事に終わり、そして2024年12月現在、今年度の学会大会も、講評という方法に変わったことなどを除けば2020年度以前とほぼ変わらぬ姿に戻して実施運営される予定です。しかし2020年度の「オンライン学会」はそれでも、同時に難しい問題も露呈することになりました。例えば2020年度、従来の学会にあった「学生事務局」はほとんど自然消滅の状態になってしまいました。2020年度の表彰式では、2019年度当時学部3年生で、「学生事務局」の姿を見ておられた学部4年の学生さんに、2019年度の「学会」当日の設営・活動を中心に報告していただくと同時に、学生事務局が2020年度に活動が引き継がれなかったこと、それゆえ一旦の活動休止を公言することになりました。私見ではこの年にこの学生事務局が機能しなかったのは、コロナ禍のためと言うより、すでに進行していた学生事務局の組織の弱体化が、学部生の演習（ゼミ）履修率の低下と相まって引き起こされた事態だったように思われますが、2024年度現在、この学生事務局の活動は、演習・卒研委員会を中心とする演習（ゼミ）の連絡協議会の再活性に引き継がれ、新たな展開を見せているようです。学部創設25周年を迎えた今、この展開を新たなスタートとして期待している学部教員は、私も含め少なくないと思われます。

さらに2021年度、企画・広報委員会は、2021年7月教授会に上程した「実施要項」で、「求められているのは、学会大会参加者の研究成果に対するフィードバックであり、評価の根拠は専門知であり、かつ学際的な学部で教育・研究に携わる専門家であり、そこで培われた切磋琢磨する知見であるべきではないか」という判断のもと、「審査」で

はなく、点数をつけない「講評」に切り替えるご提案をしました。もとより国際文化学部教授会メンバーという学際的な専門家集団の専門領域は非常に多岐にわたっていますし、2020年度に学生審査が廃止されたことで、講評への変化もまた必然的だったのかもしれません。以上、駆け足で見てきましたが、とりわけ2020年度以前に国際文化学部や国際文化研究科で学ばれた卒業生・修了生の皆さんが、コロナ禍を機に様変わりした国際文化情報学会と学会大会の変遷をどうお感じになったのか、少し気になるところです。これまでに私が教授会や国際文化学部の先生方、関係者の方々からお聞きした限りで、学部創設から間もない頃、学会大会にはゼミ生同士の交流を中心に、国際文化学部生が集う楽しみがあったのではないかと想像します。また審査や賞金といった制度にも、参加率の向上による教育の質の担保、学会と組織の盛り上がりに対する期待が込められていたように思われます。しかし25年間という時間は、大学をめぐる時代と環境の変化のみならず、学生気質の変化を認めるにもまた十分な年月でもあるのでしょう。これまでコロナ禍がさまざまな場所で様々な前進のきっかけをもたらし、時にやむをえない変革をも強いたのは周知の通りですが、後年振り返ってみた時に、2021〜2021年当時のこの「学会」の変革が、私たちの国際文化学部と国際文化研究科のさらなる教育、研究の充実のチャンスをもたらしたと言えるのかどうか、私も国際文化学部と「学会」の一員として、今後も微力ではありますが努力していければと思っています。ご清聴ありがとうございました。

‘Fancy a cuppa?’

吉永　優嘉

プロフィール：国際文化学部国際文化学科 4 年生。2023 年 9 月 22 日～12 月 18 日、SA プログラムでシェフィールド大学（イギリス）に留学。英語科と中国語科の教職課程を履修中。

✧ 始めに

‘Fancy a cuppa?’ は、「お茶でもどう？」という意味のイギリス英語です。このタイトルには、私が皆さんにお茶を一杯提供する様に、SA 先（イギリス）での私の経験や学び、気づきを皆さんと共有できれば、という思いを込めています。今回の発表がきっかけとなり、皆さんの新たな気づきに繋がれば幸いです。

✧ 異文化理解からの学び

はじめに、シェフィールドでの学習についてお話ししたいと思います。シェフィールド大学の授業形態は、主に二つに分かれていました。一つは、教室での座学の授業です。教科書を用いた学習やプリント学習、ミニゲームなどが行われました。中でも、ミニゲームは、日本でいう双六のような感じで、出たトピックについて英語で話をするという、あまり日本では見られないような新鮮な活動でした。もう一つの授業形態として、週に一度、オンラインでの学習がありました。また、その他にも、教室外の活動として、国内日帰り研修旅行や自由散策などがありました。

シェフィールド大学での授業自体も新鮮なものでしたが、授業を受ける中で、異文化を感じたこともありました。先に述べたとおり、シェフィールド大学の授業では、教科書を用いた学習やプリント学習、そしてミニゲームを通した学習などがありましたが、いずれの場合も、先生から、自分の意見を求められる機会が日本よりも多くありました。決して、強制的に意見を要求されるというわけではありませんが、自分から積極的に発言をしないと、授業が充実したものになりにくくなってしまいます。実際に、受講生が誰も一言も話さなかったため、授業中にもかかわらず、教室が静まりかえってしまったこともありました。そのため、授業を充実したものにするためには、自信を持って、積極的に発言やグループディスカッションに取り組むことが大切でした。また、教室での授業において、私は日本にいる時と同じように過ごそうとしていたのですが、そんな時にもアジア圏とイギリスの文化の違いを感じることがありました。例えば、帽子を被ったまま授業を受けたり、授業中に手で口を覆い隠さずあくびしたりしている学生に対して、現地では、それを先生がきちんと注意していました。もちろん、こういった行動は日本でも失礼に当たりますが、それに対して先生から授業中に厳しく注意されるということは、イギリスよりは少ないのではないでしょうか。そういった経験からも、イギリス文化のマナーを守りながら授業を受けることが必要であるということを改めて感じました。

また、授業中だけではなく、その他にも多くの場面で積極的な発言が求められたり、ディスカッションをしたりする機会がありましたが、そういった活動に参加する人たちの国籍や社会背景、文化背景は実に様々です。国籍や社会背景、文化背景が異なれば、当然ながら、考え方も人によって様々です。自分とは異なる考え方の人に出会うこともありましたが、礼儀をわきまえて、相手と適切な距離感をつかみつつ関係を構築していく必要がありました。イギリスは、アジア圏よ

りも少し開放的な雰囲気や考え方があるので、私自身、現地で気分がやや開放的になってしまい、つい礼儀を忘れてしまいそうになることもありました。しかし、たとえ海外であっても「親しき中にも礼儀あり」で、日本にいる時と同様に、礼儀正しくいることが重要だと思います。先ほど述べたように、国籍や社会背景、文化背景が異なる人が多く集まる海外では、様々な人に対して、礼儀をわきまえて適切な距離感を保ちつつ接することは、なおさら重要なことだと思います。そして、自分と異なる考えの人に出会っても、過度に気にすることなく、うまく受け止めながら過ごす術を、SA を通じて学べたのではないかと思います。

✧ JCR を通して

次に私がお話ししたいことは、JCR についてです。皆さん、JCR とは何かご存じでしょうか。ヒントとして、それぞれの英単語とその意味を提示します。「Japanese：日本／Culture：文化／Reception：受容」です。少し考えてみてください。JCR とは、各 SA 先で学生が主体となって開催する日本文化紹介イベントのことを指します。

このイベントを実施する意義は主に二つあります。一つ目は、各 SA 先において、現地の学生と交流する絶好の機会になることです。二つ目は、ゼロからイベントを作り上げる楽しみを体験できることです。私は、特に二つ目で挙げた「ゼロからイベントを作る楽しみ」に関心を持ち、JCR の企画代表者になりました。そして、私の他にも JCR を実施したいと思っているメンバーとグループを作り、本格的に JCR の実施に向けた話し合いや準備を始めました。

ところが、実際に JCR を企画する中で、現地では様々な困難に直面しました。日本文化と言えば、日本のお菓子や書道、折り紙、カルタ、花札、福笑い等、紹介したい事柄は比較的すぐに思い浮かびました。しかし、実際にイベントを実施するとなると、どこで、どのよう

に実施すれば現地の学生としっかり交流できるのか、そしてSA中のいつ実施すれば良いのかが分からず、途中、企画作りに行き詰まってしまいました。特に、どのように運営すれば現地（シェフィールド）の学生と十分に交流できるのかについては、シェフィールド大学の留学生向け施設に勤めているメンターの方に相談したことがありました。メンターの方は、「この施設では、毎週ゲームを実施する機会があるから、それをうまく活用してみたらどう？」という素敵な意見を提案してくれました。しかし、留学生のみが集まる施設でJCRを実施したのでは、留学生同士の交流はできても、現地（シェフィールド）の学生とは十分に交流ができないのではないかと思いました。イギリスのシェフィールドで学んでいるからこそ、その地域の学生との交流を深めることにJCRを実施する意義があること（先に述べた一つ目の意義）を思い出したのです。結局、そこでまた振り出しに戻ってしまう形になり、JCRの準備が行き詰まってしまいました。

こういった現地の状況以外にも、JCRの準備が行き詰まってしまったのには、個人的理由もあったように思います。それは、知らない土地で、知り合いもいない中、その環境に慣れることの忙しさと、ゼロからイベントを企画する難しさから「やろう！」という姿勢をなかなか育めなくなっていたことです。イベントを企画すること自体は決して諦めてはいませんでしたが、準備段階でPDCAサイクルを着実に実行することができていなかったように思います。

このように、JCRの準備段階では様々な困難が伴いましたが、幸いにもシェフィールド大学の日本語が話せるメンバーが所属しているJapanese Societyというサークルをシェフィールド大学のサークル一覧ページで見つけて連絡を取り、そのサークルに所属している学生に運営を手伝ってもらうことで、なんとかJCRを開催することができました。ただ、開催当日にもいくつか問題が発生しました。まず、企画作りに難航したことにより、JCRメンバーとJapanese Societyのメン

バーとの事前ミーティングが不足しており、会場の下見や当日の動きのシミュレーション等について、十分にできていませんでした。加えて、当日は運営メンバーが1人お休みしたため、人員不足になってしまいました。幸いにも、Japanese Societyのメンバーがその欠員を埋める形で積極的に運営を手伝ってくれたため、JCRを無事開催することができました。多くの不安要素がある中でのJCR開催となりましたが、その様な中で、現地の学生としっかり交流するという目的を達成し、JCR開催を成功させることができたのは、ひとえに、Japanese Societyのメンバーのおかげです。Japanese Societyのメンバーには、今でも感謝の気持ちでいっぱいです。

✧ 今改めて思うことと帰国後の活動

先ほど述べた通り、JCRの準備・運営には様々な困難が伴いました。そういった困難を解決するためには、様々な能力が必要なのかもしれませんが、根本的なこととして、実行力を育むことが非常に重要であることは間違いないと思います。実行力は、人間が何かを成し遂げるための重要な能力の一つであり、普段の生活やビジネスなど多くの場面で有益なものだと考えます。

この実行力の重要性について改めて考えたのは、SAでの経験を振り返りつつ、今回のシンポジウムに向けて準備をしている時でした。なぜJCRの準備段階で様々な困難に直面したのか、そしてそれを打破できるような実行力を育むためにはどうすれば良いのかについて、改めて考えました。

そこで思ったのは、やはり先に述べた通り、知らない土地で、知り合いもいない中、その環境に慣れることの忙しさとゼロからイベントを企画する難しさから「やろう！」という姿勢を育めなくなっていた、ということでした。そういった状況の中で、どのようにして自らに実行力をつけさせることができたのか、という問いに答えるのは簡単で

はありませんし、実際、実行力を育むための方法には様々な考え方があるかもしれません。

その実行力（前向きに積極的に取り組む態度）を引き出すことについて、自分にとって一つ関わりがあると思うのは、（物理的な意味での）「姿勢」です。私は、小学校2年生から中学2年生までバレエを習っていたことがあり、綺麗な姿勢を保つことがいわば常でした。それ以来、日常生活で姿勢を綺麗に保っていると空気を吸いやすくなり、気持ちを前向きに、積極的に切り替えることができました。JCRの運営上、様々な困難に直面する中で、物事に取り組む態度としての姿勢と、物理的な意味での姿勢をうまく意識しつつ連携させられたら、もう少し自分自身の実行力を上げられたのかもしれません。

また、私は大学で教職課程を履修しており、SAから帰国後の2024年5月に、中学校に教育実習に行きました。教育実習期間中、自分で授業をするわけですが、授業の運営はJCRのようなイベントの運営と似た面があると思います。イベントの運営と同じく、事前の準備が授業の成功を左右します。前向きに、積極的に授業準備に取り組まなければ、授業はうまくいきません。そして、教師の授業への取り組み方が、生徒の授業への取り組む態度に大きな影響を与えます。教育実習の開始当初は、授業内容をわかりやすく、教科書通りに進めることをメインとしていましたが、教育実習を進めていくうちに、教師が授業の波を作ること、そして生徒を巻き込んで授業づくりを行うことの重要性を学びました。

実習期間の最後に行われた研究授業では、それまでの実習期間で学んだことを最大限活用して積極的に準備し、姿勢を正して、生徒を巻き込んだ授業を行うことができ、好評を頂くことができました。姿勢を良くすることはやる気に繋がります。心構え・態度としての姿勢と、体の姿勢の双方を常に意識し、実行力を育むことを癖にしたいと考えています。

✧ 最後に

最初にお話しした通り、シェフィールド大学での授業や大学生活全般を通じて、現地の文化や習慣を守ることの重要性や、何事にも自信をもって積極的に取り組むことの重要性を学ぶことができました。また、自分とは異なる文化背景を持つ人々との関わりにおいては、礼儀をわきまえて適切な距離感を保ちつつ接することの重要性も学びました。そして、自分と異なる考え方の人に出会っても、過度に気にすることなく、うまく受け止めながら過ごす術も、SA を通じて学べたのではないかと思います。これらの学びは、実生活の様々な場面にも活用できるはずです。また、JCR の企画を通じて、実行力を育む重要性も学びました。

私が今日お話ししたことは、当たり前だと感じる方もおられるかもしれません。しかし、その当たり前に気づけなかったり、当たり前だと気づいていても意識できていないことが多かったりします。そういった、当たり前のことを改めて意識し、自分の中に改めてそれを植え付けることの重要性、それを今回、再認識することができました。

以上述べてきたような私の学びが、皆さんの新たな気づきへと繋がったら、とても嬉しく思います。本日はご清聴ありがとうございました。谢谢各位的聆听。Thank you for listening.

SA 上海の学び

小西　和佳

プロフィール：国際文化学部 4 年。2023 年度 SA 上海に参加し、SA 中の副リーダーを務めた。法政大学茶道研究会に所属。

■ はじめに

これから、2023 年度に実施されたスタディ・アブロード・プログラム上海（以下 SA または SA 上海と称します）で私が得た学びについて発表させていただきます。私は法政大学国際文化学部 4 年の小西和佳と申します。今回、私は SA 上海の副リーダーを務めさせていただき、プログラム期間中の学生の取りまとめを行ないました。

本題に入らせていただく前に、簡単に SA 上海の概要と私が在籍したクラスについて紹介いたします。SA 上海では、上海外国語大学に留学を行い、大学の留学生向けの中国語学習プログラムに参加します。また、新学期開始前に行われるテストによってクラス分けが行われます。クラスは大きく初級・中級・上級の三つのレベルに分かれており、各々のレベルに対し、更に 1 班～3 班の三段階のクラスが設定されています。私が在籍していたのは「中 -1（中級 1 班）」、全体では中間くらいのレベルでした。クラスの生徒数は 28 名、国籍も非常に多様で、インドネシア、ウクライナ、ウズベキスタン、韓国、タイ、ベネズエラ、ポーランド、モロッコ、ベラルーシ、ロシア、日本の学生が在籍していました。バランスよく中国語の習得ができるよう、授業はリスニング、会話、読解といった分野を 5 つの授業に分けて行わ

中 -1（中級 1 班）クラス集合写真

れていました。各授業で必ず一度はディスカッションの機会があったことが私の印象に残っています。

このクラスでSAの4ヶ月間を過ごすことで、私は主に2つの事柄の重要性を学びました。第一に「『意見』を持つこと」、第二に「自国を知ること」です。以下では、私がどのような経緯でこれらの事柄を学んだのか、そしてそれを今後どのように活かしていくか、述べさせていただきます。

■ 第一の学び 『意見』を持つこと

まず、「『意見』を持つこと」について述べさせていただきます。

私が在籍していたクラスでは、学生の多くがディスカッションや発表の場を好む傾向にありました。先述したように、留学中は、各授業で少なくとも一度はディスカッションの機会が設けられ、また個人に

よる発表の機会も多くありました。特に会話の授業では、毎回生徒が授業の冒頭に小作文を用意してスピーチを行いました。作文の内容によってはそこから予定外の討論の場を設ける事が多々あり、担当の先生の話では、私のクラスは例年よりもディスカッションの回数が多く、学生も非常に積極的に参加していたとのことでした。

このようなクラスにおいて、私は、討論に参加する上で重要なことは、とにかく意見を出すことだと考えていました。有意義な議論をするためには個性的な意見や沢山の視点から意見を出すことが重要だと考え、新しい意見や他人と別のアイデアを出すこと、沢山の意見を出すことに固執していました。その結果、オリジナルな意見が思いつかなければ発言を控えることがあったり、意見を出し過ぎて話の収拾がつかなくなったりすることがありました。また、自身の意見を出すだけ出して、他人の意見に対する賛否を示すことが少なかったため、議論における立場が不明瞭になる時もありました。

SA 先の授業で多く設けられた議論の場において、私は、他生徒の姿勢から、自分自身の上記のような欠点に気づくことができました。とにかく数やオリジナリティにこだわる私に対して、他生徒の方々は出された意見に対する賛否をまず示してから自身の発言をします。更に、新しい意見を出す場合は既出の意見を改良した案を出すことで、冗長な議論を減少させていました。意見は多い方が良いと私は考えていましたが、ある程度意見の数を絞ることによって意見同士の比較が容易になります。

このように、SA の経験によって私は他者への意見に対して意見を持つ、ということの重要性を学びました。議論とは互いの意見を出し合ってそれを発展させ、新しい考えを導き出す場なのだということを改めて認識することができました。

■ 第二の学び　自国を知ること

第二に私がSAで学んだことは「自国を知ること」です。

私は、SAに参加するにあたって、「文化の発信」を意識して参加するようにしていました。S A上海では法政大学独自の取り組みや上海外国語大学の主催するイベント、多様なバックグラウンドを持つ生徒とのコミュニケーションなど多くの文化交流の機会があります。留学は、自分自身が他の文化に触れる機会であると同時に、他文化圏の人が私の持つ文化に触れる機会でもあります。異文化について学びつつ、私の文化も知ってもらえるよう意識してSA期間を過ごすようにしていました。

まず簡単に、「文化の発信」という点について、私が今回のSA期間中に行った取り組みについて紹介させていただきます。授業内ではスピーチ、法政大学の学生としては、後述するJCRの実施と、ニューイヤー・イベントへの参加、最後に個人の取り組みとして上海市内にある茶道教室の見学を行いました。第一の学びの部分でもお話ししたように、会話の授業ではスピーチをする時間がありました。スピーチは挙手制だったため私は全体で10回ほどスピーチを行いました。テーマとしては、「日本（自国）の若者が好む文化」、「自身の好きなスポーツ」、「自国と中国の交通機関の違い」、「家族紹介」等がありました。

次にJCRとニューイヤー・イベントについて紹介します。JCRとはJapanese Culture Receptionの略称で、法政大学の学生がSA先で自主的に実施する、日本文化を紹介するイベントのことです。2023年度のSA上海では、「祭り」をテーマに日本の伝統的な遊びやソーラン節の紹介を行いました。ニューイヤー・イベントは、上海外国語大学が主催する年末のイベントです。学生が自由に参加して歌やダンスを披露する機会です。私は数名の法政大学の学生と共にソーラン節を披露しました。

最後に、上海市内にある茶道教室の見学についてです。私は法政大

学の茶道研究会に所属していて、上海市内でOBの方が茶道教室を開いていると聞き、留学前から見学を計画していました。茶道教室の生徒は、10人中9人が中国人の方で、いくつかお話も聞かせていただきました。

これらに取り組むにあたって、私は日本文化に馴染みの無い人が持つ日本へのイメージや、日本に関してどのようなことが周知されているのか、特に日本のサブカルチャーへの認知度や文化に対する予備知識を意識して確認するようにしていました。文化を発信するにあたって相手がどれくらいこちらの文化について知っているのか、そのレベルを把握することは重要です。相手に伝わりやすく、かつ触れやすいようなイベントや発表にすることを意識しました。

その中で気づいたことが、SAでの第二の学びである「自国を知ること」の重要性です。上述の事柄に取り組む中で、私は日本人が日本文化について詳しいとは限らない、ということを意識するようになりました。例えば、和室に対する説明を海外の人から求められた時、現代の日本人はほとんどその知識がありません。自宅に和室が無い人も多いですし、畳のある部屋に入る機会すらほとんどないという人もいると思います。JCRのクイズコーナーでは、外国人留学生だけでなく、法政大学以外から来た日本人留学生にも体験してもらいました。その中で、日本人だけどクイズが解けない、といった状況が何度かありました。その学生からは、「日本の物だけど、特に意識したことが無かった」、「家に無いから分からなかった」、「なんとなく知っているが、特に詳しく調べたことは無かった」といった言葉が返ってきました。一方で、こちらが驚くほど日本文化に対して深い知識を持つ海外の学生もいて、この差はどういうことかと疑問に感じました。すると、日本文化に詳しい外国人留学生から、「アニメや漫画で見て全く知らない文化だったから調べた」、「自国には無い文化だったから気になって調べた」といった発言を聞き、日本人だからこそ敢えて日本文化につい

て興味を持つことが無いのかもしれないと考えました。

また、茶道教室の見学の際にも似たようなことがありました。中国人の生徒の方に茶道を始めたきっかけについて伺うと、「日本旅行中に茶道を体験して興味を持った。茶道は、その原点が中国文化だとは知らなかったから、中国のことも学んでいるようで一石二鳥だ」と話していました。その方は、異文化だと思っていた日本の茶道に自国の文化が関連していることを知り、日本の茶道と並行して中国のお茶文化についても学んでいるそうです。何気なく淹れているお茶も、ルーツを知ると更に美味しく感じるのだとその方はおっしゃっていました。身近にあるものや自国にあるものだと、完全な未知のものではありません。特に深い知識が必要になる機会が無ければ、異文化以上に関心を持つ機会が少ないのではないでしょうか。そして、異文化を理

JCRの集合写真

ニューイヤー・イベント

解するために自国の文化や歴史を知っておく必要が出てくるのではないでしょうか。

このことに気がつき、私は自国の歴史や文化への関心を持つことの重要性を意識しました。そして異文化理解の重要性が訴えられる現代で、まず必要なことは、自身の持つ文化や自国の文化に関する知識を深めることだと学びました。自国を知ってから他国の文化との比較が出来るようになり、異文化理解を深めることが出来るのだと私は考えています。これが、今回のSAで得た第二の学び「自国を知ること」です。

■ 得た学びを活かして

SA上海で、私は2つの学びを得ることができました。ここからは、私がこれらの学びをどのように活かしていくのか、少しお話しさせていただきます。

私は卒業後、ホテルに就職を予定しています。そのため、ホテルという環境から日本文化を発信する人間になりたいと考えています。宿

泊業を通して、国内外を問わず沢山の方と関わることで、「日本」の認識を学び、「日本」を発信する一助となりたいと考えています。特に現在は、ホテルでも様々な日本文化の体験ができ、観光地との連携も積極的に行われています。そこで日本文化に触れるのは海外の方だけではありません。日本人の方にも日本文化に親しみを持ってもらえるような活動をしていきたいと考えています。日本文化を知った人が、更に周囲の人に日本文化を広め、世界中の人に日本を知ってほしいと私は願っています。

以上で、私がSA上海で得た学びについての報告を終わります。拙い内容ではございますが、お付き合いいただき誠にありがとうございました。

SJプログラムでの学びと留学生として

－日本での留学生活について

呂　彤琳

プロフィール：国際文学部国際文化学科4年生、稲垣ゼミに所属。中国から来た留学生。2019年に留学生として来日、留学生入試を通して2021年に法政大学国際文化学部に入学。

皆さん、こんにちは。法政大学国際文化学部、国際文化学科4年生の呂彤琳と申します。この度、法政大学国際文化学部が創設25周年を迎えたことを、心よりお祝い申し上げます。これまでの長い歴史において、国際的な視野を持つ人材の育成に貢献してこられたことに深い敬意を表します。SJプログラムの学生代表として、この記念すべき節目に、皆様と共にその歩みを振り返り、今後のさらなる発展を祈念できることを大変光栄に思います。

私は中国河南省洛陽市から来た留学生です。日本に留学するきっかけは二つあります。まず、私が通っていた中学校はインターナショナルスクールだったため、様々な国籍の人々と交流する機会がありました。その中で、物事に対する考え方や問題解決方法が国籍によって異なることに気付き、多様な国、言語、文化に対して深い興味を抱くようになりました。中学時代にはサマーキャンプでアメリカに行き、欧米の文化に触れる機会はあったものの、身近な日本の文化を学ぶ機会がなかったため、いつか日本に行ってみたいと思いました。

その後、日本で働いている祖父から日本の暮らしや仕事について多

く話を聞き、メディアで得た日本のイメージとは異なる現実に触れ、実際に日本で留学してみたいという思いが強くなりました。親と相談した結果、日本への留学を決め、2019年4月に来日しました。2年間日本語学校で学び、留学生入試を経て法政大学国際文化学部に入学しました。

法政大学は留学生を受け入れてきた歴史が長く、1904年には清国留学生のために法政速成科が開設されました。この卒業生の中から、中国の近代化や新中国建設において重要な役割を果たす人物が輩出されています。法政大学の大きな特色である国際交流の源がここにあると感じます。その中で、法政大学国際文化学部に惹かれた理由は、豊富なカリキュラムがあり、自分の興味に応じてテーマを自由に履修できる点です。また、特に留学生向けのSJプログラムがあり、多角的に日本を学べることにも魅力を感じました。国際的な環境で学びたいという思いから、法政大学国際文化学部への入学を決意しました。

法政大学国際文化学部での三年半は非常に充実した学生生活でした。専攻の表象文化コース以外にも、言語文化コース、情報文化コース、国際社会コースの授業を履修しました。これらの授業を通じて、自己の文化的枠組みにとらわれない幅広い知識と柔軟な理解力を身に付けることができました。異文化共感を持って理解すると同時に、自己の文化を客観視する視点を学びました。また、英語および日本語の習得を通じて、異文化とのコミュニケーション能力を養うことができました。

日本と中国の関係は古来より非常に密接で、「一衣帯水」と形容されることもあります。両国の関係には、文化や人の交流といった積極的な面がある一方で、戦争や侵略という不幸な面も存在しました。しかし、日中両国の平和と発展は世界の主流であり、両国民の共通の願望でもあります。そのため、歴史に学び、現在を見つめ、未来を創ることが重要だと考えます。SJプログラムを通じて、平和の大切さを

改めて実感しました。ここで、自分の大学生活を振り返り、SJ プログラムで学んだことを皆様にお伝えしたいと思います。

留学生を対象としたSJ プログラムは、日本国内研修を通じて日本の社会や文化を深く理解することを目的に、2012 年度から開始されました。2 年生の春学期に「世界とつながる地域の歴史と文化」という授業を受講した際、これまで中国で学んできた歴史が一方的であることに気付き、改めてその歴史を調べたいと思い、2022 年の夏にSJ プログラムに応募しました。コロナ禍で日程は短縮されましたが、教員の髙栁先生、留学生 4 人、日本人学生 2 人と共に、充実した研修を過ごしました。

2022 年 9 月 8 日、東京で集合し、新幹線で長野県天龍村に向かいました。天龍村の村長にお会いし、その後、平岡ダム建設工事犠牲者火葬場跡などの追悼碑を訪れました。午後には飯田市に到着し、図書館で必要な資料を借りることができました。二日目には飯田市美術博物館、長岳寺、満蒙開拓平和記念館を訪問しました。三日目には川本喜八郎人形美術館と飯田市平和祈念館を訪れ、その後、地元の日本語教室を訪問しました。日本語教室での時間は、私の人生においても忘れられない経験となりました。国籍、年齢、性別を問わず、日本語を学ぶ人々との交流は、今でも感動をもたらしています。四日目には、残留孤児の二代目である大橋さんにお会いし、ご自身の経験についてお話を伺いました。大橋さんの話から、日本人であることや中国人であることについてのアイデンティティーの悩みを深く感じました。五日目には、公民館で最終発表を行い、地元の住民や研究者、記者の前で、自分が調べた内容を発表しました。緊張しながらも、自分の考えをしっかりと伝えることができました。最終日は中央アルプスを訪れ、研修を締めくくりました。

私が発表したテーマは満蒙開拓についてです。中国で学んだ歴史で

は、日本人は侵略者として描かれていましたが、今回の研修と自分の調査を通じて、日本人にも被害者としての側面があることを知りました。騙されて満州に送られた人々や、強制的に満州に行かされた人々もおり、戦後、残留孤児など中国に遺された方々も大きな社会問題となっています。そのため、満蒙開拓の歴史とその歴史観について発表しました。

SJ プログラムへの参加を通じて、日本の社会や文化を深く理解することができました。東京などの大都市以外での生活を体験することで、多面的に日本を見つめる視点を得ました。また、歴史を正しく認識することの大切さを改めて感じました。これまで持っていた日本人に対するイメージが、この研修によって大きく変わり、自分の目で見て、自分の頭で考えることの重要性を実感しました。中国のことわざ「百聞は一見に如かず」が示す通り、人から何度も聞くより、一度自分の目で見る方が確かであることを実感しました。SJ プログラムを通して学んだ、多角的な視点で問題を捉え、多様性を尊重し、互いに助け合うことの大切さは、今後の大学生活だけでなく、人生全体においても大切にしていきたいと思います。さらに、歴史を記憶することは未来を切り開くためであり、戦争を忘れないことは平和を持続するためです。それは決して「過去」にこだわるためではありません。現実を直視し、現在に立脚しながら、未来を築いていくことが大事だと思います。

日本での留学は私の人生を大きく変化させました。大学生活やアルバイトなどを通じて色々と貴重な出会いがあり、グローバルな価値観が磨かれました。メディアから得られた情報やステレオタイプに頼らず、多角的な視点また相手の立場に立って考えれば、想像力を働かせ物事をより多面的に捉えることができると感じました。

日本の文化や日本での生活はもっと好きになり、日本での就職も決めました。これからも、国際文化学部で学んだことを活かし、私たち

飯田市公民館における個人発表の様子

は社会人として成長し続けていきたいと考えます。言語ももちろんのこと、共通点の多い日中文化をもっと両国の人達に伝え、仕事でも日常生活でも日中友好の架け橋になれるように頑張っていきたいと思っています。

今後も、多くの学生が国際文化学部で新たな知見や視点を得ることを期待しております。留学生としても、日本と中国のさらなる友好関係の発展を期待しています。

最後に、法政大学国際文化学部の更なる飛躍を心よりお祈り申し上げます。私の発表は以上となります。ご清聴ありがとうございました。

海外 FS（Field School）成果報告

吉村　常葉

プロフィール：国際文化学部 4 年。石森ゼミで文化人類学を学ぶ。またフランス語を専攻し、2022 年度 SA でフランスのアンジェに語学留学。2024 年度海外 FS（フィリピン・マニラ）に参加。

■ はじめに

これから法政大学国際文化学部の海外 FS プログラムについてお話ししたいと思います。国際文化学部 4 年の吉村常葉と申します。本日は私がこのプログラムに参加した動機から、現地での活動や学び、私がこの研修を通して制作したアートワークについてお話ししていきます。

■ 海外 FS の概要について（表象文化コース）

まず初めに海外 FS について説明します。本プログラムの目的は、国際文化学部での学びを活用し、海外でより専門性の高い技能を習得することです。具体的には、地球規模問題（グローバル・イシュー）の分析力、課題発見／課題解決能力、異文化の中で表現する技能です。また、技能面だけではなく、日本と異なる環境で思考力や精神力を養い、持続可能な社会を構築できる人間の育成にも重きが置かれています。

その中でも、稲垣先生が担当される表象文化コースでは、フィリピン・マニラでのフィールドワークを通してフィリピンの文化や人々の

暮らし、芸術表現や文化政策への理解を深めます。そして表象文化コースの特徴的な学びとしては、フィールドワークを通してアート作品を制作するという課題があります。

今年の制作テーマは「インターベンション・アート」でした。

「インターベンション・アート」とは、マニラの街や文化施設を散策し、コミュニケーションしながら「都市に介入する」アートワークの手法を探ることを意味します。

■ 海外FSに参加した動機について

次に私がこのプログラムに参加したきっかけをお話しします。理由は主に3点あります。

1点目は、「フィリピン芸術文化への関心」です。読者のみなさんはフィリピンにアートのイメージを持っておられるでしょうか。私はありませんでした。先ほどお話ししたように私はSAでフランスを選択し、街中に溢れる美術館やギャラリーで古から築かれた西洋美術を数多く鑑賞しました。フランスは「芸術の街」として広く知られていますが、フィリピンで生まれるアートワークは全く想像がつかず、“フィリピンアートとはどのようなものだろう？”という小さな疑問が参加へとつながりました。

2点目は、「コミュニケーションの探求」です。私は東南アジアを訪れた経験がなく、現地の方と親密なコミュニケーションをとる機会がありませんでした。留学を通してカナダ、フランス、ドイツの人々との関わりを持ってきましたが、互いの文化を理解しコミュニケーションすることで仲を深めてきました。

この経験から、芸術のフィールドワークを通してフィリピンの人々の視点で文化を理解することが、私のコミュニケーションを拡張すると考え参加しました。

そして3点目は、「自分の足で情報をとる力」です。フィールドワークの面白さや重要性は石森ゼミで学んで興味をもっていましたが、今回はそ

れを「海外」で実践するとても良い機会だと思って参加しました。情報の受け取り方がインスタント化し、自分が選び取るべき情報が見えにくくなっている昨今だからこそ、このような実践に挑戦したいと考えました。

■ フィリピン・マニラでのフィールドワーク

このような思いを持って渡航したフィリピン・マニラでの活動についてお話しします。

8月5日　エスコルタ・ビノンド

エスコルタ・ビノンドは、かつてマニラの商業の中心地でした。世界最古の中華街の一つであるビノンドもあり、中華、西洋、東南アジアの雰囲気が混ざったような印象が強い街でした。観光地であるチャイナタウンにもかかわらず、冠水した道路で裸で水遊びをする子供たちを見た時にこの国の伸びやかな国民性を感じました

フィリピンでの食事の様子

8月6日　The O home

このアートコミュニティでは、子育て中のお母さんへの創作活動を促し、アーティストとして女性としての社会的立場を深く考えていらっしゃいます。O homeでは、会話だけでなく歌などの表現を通して現地の人々と仲を深めました。また、引率の方が紹介して下さった、O homeの近くにあるフィリピン料理屋さんもとても美味しかったです。このO homeに関しては後ほどまた詳しく述べます。

8月7日　フィリピン大学とアテネオ大学

どちらもフィリピン国内でトップクラスの大学であり、とにかく敷地が広大でした。またかなりきちんとしたアートギャラリーが併設されており、文化振興において若い世代から自由に発信できる自由な空間が開かれていました。

■ （番外編）フィリピンの食事

ここで番外編なのですが、これがO homeの帰りに食べたフィリピン料理です。私のおすすめは「ナスのオムレツ」です。ぜひフィリピンに行かれた際には食べてみてください。

■ 作品紹介「フィリピンで過ごせば」

私が海外FSで手がけたアートワークは「フィリピンで過ごせば」という約5分間の映像作品です。映像内では、「フィリピン渡航直後に体内時計で30秒を計り、滞在中フィリピンの時間観念を意識して過ごせば、帰国直前の計測ではズレが生じるのか」というチャレンジをしています。

私が作品制作でテーマにしたのは「フィリピノタイム」です

「フィリピノタイム」とは、フィリピン人が持つ特有の時間感覚のことであり、例としては、友人との集まりやカジュアルなイベントでは時間に遅れることなどが挙げられます。この時間感覚は、時間を守ることよりも人間関係を優先する文化に起因するということを事前学習で学びました。そして事前学習に加え、現地でのさらなる学びもありました。

マニラでは日本とは異なる時間観念を感じる機会が多くありました。具体的には、駅には電車の時刻表や公共の建物には時計がほとんど設置されていませんでした。そして、各施設の方に「時計はありますか？」と尋ねると、「見ないから置いていない」と返答されることが多かったです。また、前提としてインフラが完全に整っていないフィリピンでは大渋滞でスムーズに移動することは困難でした。

渡航直後は、あってないような予定が守られない環境に不安感を覚え、日本人の感覚でこの文化を考えると“ルーズなもの”と捉えられる可能性も感じました。

しかし、この感覚の変化をO home訪問時に感じました。先ほども少しお話ししたO homeではとても温かいコミュニティでした。日本

やフィリピンの楽曲を、ギター片手に合唱したことが思い出です。その時も言うまでもなく予定が2時間ほど遅れていたのですが、私も気付けば時間を忘れていました。日本でも時間を忘れて楽しむということは可能ですが、その行動に対して少し厳しい眼差しを社会から向けられていると考えました。それが、フィリピンでは当たり前のように許容されていて、このような人と人のつながりこそが「フィリピノタイム」の本質であると感じました。

■ 作品に込めた想い

現地での経験を通して、フィリピン特有の時間感覚は決して“ルーズ”という言葉のみで修飾されるべきではないと感じました。目の前のつながりに没入し、対話を通して関係性を育む。時間に追われるのではなく、時間を自由自在に操るようなこの感覚は“ルーズ”ではなく、“心のゆとり”だと思います。もちろん日本はフィリピンではないので時間厳守は大切な価値観ですが、日常生活のふとした瞬間に目の前の愛に気付くことの心の豊かさ、この作品からそのようなことが伝わればいいなと思います。

■ 現地の人々の視点を獲得することの大切さ

今回の海外FSでの学びを一つのキーワードに集約しました

冒頭でご説明した3つのきっかけの視点を携えて見えてきたキーワードは「熱」です。

まず、1点目の「フィリピン芸術文化への関心」ですが、事前学習でフィリピンアートは社会に自らの意思を発信する手段と学んでいました。実際に現地では、日本ではなかなか題材にすることがむずかしい意思や危機感を表現した作品や、インディペンデントの思考が現れた作品が並んでいた印象です。アーティストの熱量が最大限に詰め込まれた表現を肌で感じました

タイトル：「フィリピンで過ごせば」（映像作品）

次に2点目は、「コミュニケーションの探求」です。

私の作品にも詰め込んだ時間観念ですが、規則正しいことよりも目の前の温かい空間、触れ合いを大事にしているフィリピンの人々の温もりを感じました。

そして3点目が、「自分の足で情報を取る力です」。私は今まで持っていたフィリピンの人々のイメージが大きく変化しました。フィリピノタイムなどから得た事前情報では、穏やかな国民性であると考えていましたが、現地では道路横断やタクシーなど、我を出さないと生活できません。道路横断は自分で車を止めないと一生渡ることはほぼ不可能ですし、弱気ではタクシーでぼったくられてしまう可能性があります。「我が強い」と表現すると少しネガティブな表現になってしまうかもしれませんが、すなわち「自己に対する熱」=「自分を大切にする想い」を感じました。

今回の海外FSに参加して「現地の人々の視点から」様々なことを学

The O homeの方々

びました。「時間」についても、「芸術」についても、「フィリピン」についても、現地の人々の視点からものを見ることによって捉え方が大きく変わり、新たな発見がありました。

今回の実践で海外FSだけではなく、文化人類学の本質にも立ち返ることができました。皆さんもこのような貴重な経験ができる海外FSにぜひ参加してみてください。

以上で海外FSに関する発表を終わります。ありがとうございました。

学部生にとっての研究

上山　みく

プロフィール：国際文化学部4年生。松本悟先生のゼミに所属。これまでに研究したテーマは「女性差別と女性労働者」と、「居場所としての喫茶店」の二つ。

■ はじめに

これから、「学部での研究活動」というテーマで発表を行わせていただきます。国際文化学部4年生の上山みくと申します。今回の発表では、私の研究内容の紹介に加えて、研究活動から私が得たものや、他の学部ではなく、国際文化学部で研究をする意義までお話しさせていただきます。

私は、「国際協力」をテーマとしている松本悟先生のゼミに3年生の時から所属しています。ゼミの中では、日々国際協力に関する課題文献を読み、それを元にゼミ生同士で議論を行っています。また、松本ゼミでは各々が自分の関心に沿ったテーマで卒業研究を進めており、互いに切磋琢磨しながら学びを深めています。かくいう私も3年生と4年生の時に一本ずつ、計二本の論文を執筆しました。

今回の発表では、時間も限られているため、3年生の時に執筆した「職場における女性差別と女性労働者―とある戦前生まれの女性のライフストーリーから―」という論文についてのみお話しさせていただきます。本論文は、松本先生の「実践社会調査法」という授業での課題レポートをゼミでブラッシュアップした後、論文として完成させた

ものになります。

■ 研究内容

それでは早速、私の研究内容についてお話しさせていただきます。まず、戦後の高度経済成長期（1955〜73年）において、労働者の需要が高まり、女性労働者の数は飛躍的に向上しました（藤井2006）。このように、職場における女性の進出は果たされたものの、男性労働者と比較した際の「女性の低賃金」と「早期退職制」などの男女格差は改善されませんでした（宮原1981）。「早期退職制」とは、結婚退職制や出産退職制といったように、女性労働者本人の意志とは関係なく、結婚や出産を経た時点での退職を迫る制度のことを指します。また、これらの仕組みが制度ではなく、職場の慣行として存在していた職場もありました。当時は、女性は「結婚や出産後に、家事と育児に専念する」という認識が現在よりも根強かったと言えます。

しかし、こういった女性差別に対し、70年代から活発化した女性運動によって、85年に男女雇用機会均等法（以下、均等法）が制定されます。この法律により、結婚退職や出産退職などの制度と慣行は禁止されることとなりました。定年・退職における女性差別の禁止を明文化した点で、均等法には大きな意義があったと考えられます。

一方、この法律が制定されるまで、すなわち、女性労働者にとって決して労働環境が整ってはいなかった期間において、女性労働者は職場における女性差別をどう感じ、どう対応してきたのでしょうか。この疑問をもとに、本研究では「高度経済成長期（1955〜73年）から85年の均等法制定までの期間にて、女性労働者が職場における女性差別をどう感じ、どう向き合ってきたのか」という問いを設定しました。

この問いを明らかにするため、私は自らの祖母にライフストーリーインタビューを実施しました。ライフストーリーインタビューとは、単なる一問一答形式のインタビューではなく、対象者のライフ、「人

生」を語ってもらう研究方法です。従って、差別に向き合う過程をじっくり分析するためには適していると考えました。また、祖母を対象者とした理由は、問いの期間である高度経済成長期〜均等法制定までの期間に働いていた人物であるためです。祖母には、中学校を卒業して働き始めた15歳の時（1956年）から、定年退職した60歳の時（2001年）までのライフを語ってもらいました。

約一時間半にわたる祖母とのインタビューを終え、そこから得た問いへの結論は主に二点あります。論文内ではもう少し詳細に書かれているのですが、今回は時間の制約上、かなり要約した結論を述べさせていただきます。まず一点目に、祖母は職場でいくつかの差別を体験してきました。例えば、出産後にも仕事を継続した際には、同僚の男性に「なぜ子どもを産んでまでお金を稼ぐ必要があるのか？」という心ない言葉をかけられたそうです。この言葉の背景には、「女性は出産したら家庭に入り、育児と家事に専念するのが当たり前」という当時の女性差別的な考え方が読み取れると思います。これに加えて、祖母が30代の後半で別の部署へと転属希望を出した際には、「中年の既婚女性」という理由で転属を一度却下されています。若い女性労働者と比較して、中年の女性労働者には高い賃金がかかる点に加え、既婚女性は家事・育児と仕事の両立によって能率が下がる点から、採用を忌避されることが当時は多くありました（藤井2006）。

では、祖母はこれらの女性差別に対して、どう感じ、どう向き合ってきたのでしょうか。これが二点目の結論です。まず、「なぜ子どもを産んでまでお金を稼ぐのか？」という発言に対して、祖母は憤りを感じた後に「働きたいという気持ちはどうなるのか」と強く言い返したそうです。この発言のきっかけとして考えられるのが、祖母の職場における労働組合の女性組合員の存在です。というのも、祖母は最初、当時の社会の流れに沿って出産後に退職をしようと考えていました。しかし、その際女性組合員に「続けた方が良い」と強く慰留されたと

話しています。加えて、その女性組合員自身は出産後も働き続けていました。彼女の言葉と、出産後も働いている姿を見て、祖母は「出産後も女性は働いていいんだ」と自信を持ったのだと思います。故に、祖母は毅然と男性職員に言い返すことができたのだと考えました。

次に、転属希望が却下された際にも、祖母は職場の労働組合の人とストライキを起こし、転属を勝ち取ったそうです。朝から夜にかけ、転属先の部署の前に集まり、彼らとストライキを起こした経験は、非常に楽しい思い出だったと祖母は笑顔で話していました。このように、祖母が差別と向き合う過程は、決して祖母個人だけで成立していた訳ではありません。周囲の人々の声（主に労働組合員の声）を素直に信じ、彼らと協力をすることが、祖母にとって差別と向き合い、それに抗うことに繋がったと考えられます。

また、祖母が差別に向き合う過程に労働組合が深く関係していた点は、私にとって大きな発見でした。なぜなら、先行研究では、均等法の制定を含め、職場における女性差別の是正において、70年代から始まった女性運動の働きが大きく注目されていたためです。従って、インタビュー調査の前には、女性運動が祖母の職場における女性差別にも何らかの影響を強く与えたのではないかと予測していました。それにもかかわらず、祖母の話の中では一切「女性運動」に触れられず、労働組合が職場でいかに自分を助けてくれたかが詳細に語られました。ここから、職場の男女差別の改善に、女性運動だけではなく、労働運動が大きく関わっていた可能性を新たに見出すことができたと感じています。

■ 研究を通して得たもの

ここまで、私の研究とそこから得た発見について紹介させていただきました。しかし、学部生にとっての研究は、ただ調べて問いに対する結論を出すことが全てではありません。この過程を通して得られる

自省的な気付きも、非常に大切だと私は感じています。その代表的なものの一つとして、私は研究活動を経て、自分の「当たり前」に気付く力を養うことができたと思います。前述したように、私の研究では、調査の実施前に持っていた予測は、祖母のインタビューを経て見事に裏切られました。

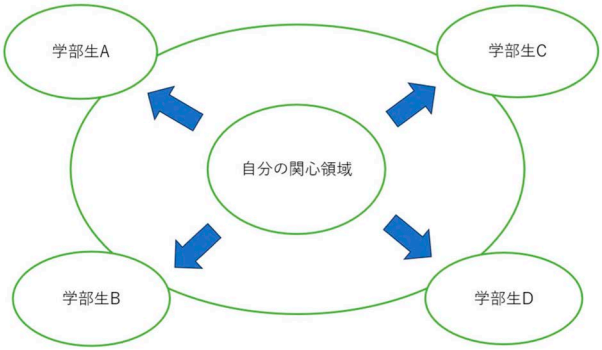
このように、自分なりに立てた予想が調査によって裏切られたことで、自らの考えの偏り、すなわち「当たり前」としていた物の見方に気付くことができました。祖母の語りが、私にとって新しい社会の見方を教えてくれたからこそ、「もっと今とは異なる物事の見方があるのではないか？」という風に、自らの「当たり前」に自省的になる姿勢が身に付いたと思っています。これは、私が調査を行い、予想外の結果と出会ったからこそ、得られたものだと強く感じています。

■ 国際文化学部で研究する意義

それでは次に、僭越ながら、国際文化学部で研究する意義は何であるのかという問いに対して、自分なりの見解を述べさせていただきます。まず、国際文化学部の特徴として、非常に学際的な学部であるということが言えると思います。これは、様々な学問分野を包摂する学部だからこそ、幅広いテーマの研究を担う学生がいる点にも繋がっています。

例として、同期のゼミ生の研究テーマを紹介させていただきます。近年注目されている「昆虫食」や「ヤングケアラー」に加え、「募金活動」や震災の「語り部活動」、はたまた「インドシナ難民」など、皆幅広い研究テーマを扱っています。実は、私の卒業研究のテーマは「喫茶店」であり、ここに「喫茶店」も入れると、実にゼミ生の研究テーマが共通点もまとまりもなく、カオスであることがお分かりになると思います。

しかし、だからこそ、自らの関心領域を広げるチャンスに溢れてい



出所：筆者作成

ると言えるのではないでしょうか。例えば、自分の関心領域を上記の図のように輪に例えてみると、ゼミ生の研究テーマは私の輪の外側にあるものです。しかし、共に研究活動を行い、彼らの研究テーマに触れていく中で、徐々にそれらのテーマの面白さや奥深さに気付いていきました。その結果、私の関心領域の輪は、矢印の方向に広がっていったと感じています。

これは、自らの研究と類似した学問分野のみを扱う学生が多い学部では、起こりにくい現象だと思います。多様な学問分野を包摂し、ある意味ではカオスな国際文化学部だからこそ、新たに知的好奇心を掻き立てられるテーマと出会うことができました。このように、「異なる分野に触れ、自分の関心領域が広がっていく」ことが、私の思う国際文化学部で研究を行う意義です。

■ 終わりに

最後に、どんなテーマを選んでも否定せずに根気強く指導し、私の研究活動を支えて下さった松本先生に、この場をお借りして感謝を示したいと思います。この度、「学部での研究活動」というテーマで発表をさせていただくことができたのも、ひとえに松本先生のこれまで

のご指導のおかげです。

また、これから国際文化学部への入学を考えている高校生の方々へ、「ちょっぴりカオスで、刺激的な国際文化学部」で、ぜひ研究をしてみませんか？　このメッセージをもって、私の発表を終わらせていただきます。ご清聴、誠にありがとうございました。

■ 参考文献一覧

藤井治枝（2006）「戦後女性労働の推移と日本的特質」、『労務理論学会誌』労務理論学会、第 16 巻、pp. 41–65、J-STAGE。
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jalm/16/0/16_41/_article/-char/ja（2024 年 11 月 18 日アクセス）。

宮原孝之（1981）「憲法一四条と女子労働者」、『法政論叢』日本法政学会、第 17 巻、pp. 50–61、J-STAGE。
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jalps/17/0/17_KJ00003721941/_article/-char/ja（2024 年 11 月 18 日アクセス）。

文化的平和のシンボル：原爆ドーム

―平和希求史（1960 年代から 2020 年代）―

蓡原　光

プロフィール：2024 年 3 月国際文化学部首席卒業（2023 年度学位授与式総代）。現在、国際文化研究科国際文化専攻研修生。学部時代、SA 先は中国（上海外国語大学）。佐々木直美先生のゼミに所属（2022 年度～2023 年度）。現在は今泉裕美子先生の指導の下、1925 年の上海における学生の動向に焦点をあてつつ帝国主義について研究中。

■ シンポジウム報告にあたって

本日はこのような機会をいただきありがとうございます。国際文化研究科国際文化専攻研修生の蓡原光と申します。学部での研究活動ということで、昨年、『文化的平和のシンボル：原爆ドーム』というテーマで卒業論文を執筆しました。学部では、佐々木直美先生のゼミに所属しており、世界遺産を切り口に様々な問題を考えるということをして参りました。そこで、広島県にある世界遺産原爆ドームの有する平和というものに興味を持ちました。来年には戦後 80 年を迎える今、原爆ドームの有する平和の意味を今一度明確にし、我々が継承することで平和を理解し直すことに繋がると考えています。これからお話しする内容は以下の通り（「はじめに」「ガルトゥング平和学と原爆ドーム」「原爆ドームの保存に込めた思い」「アンケート調査」「おわりに」）です。よろしくお願いいたします。

■ はじめに

さて、皆さんは原爆ドームと聞くと何が想起されるでしょうか。これら（「原爆」「核兵器廃絶」「世界遺産」「戦争の悲惨さ」「平和の象徴」）は全て原爆ドームが内包している要素と言えると思います。多様な意味を有した原爆ドームは、往々にして世界平和のシンボルや人類史上初の原爆の惨禍を後世に伝える証人として語られるわけです。

図 1　原爆ドーム（蘓原撮影）

原爆ドームの正式名称は、「広島平和記念碑」です。この名称からも分かる通り、人々からは平和のシンボルだと見なされているわけです。元々、広島県の様々な物産を展示していた建物でしたが、先の大戦による原爆の投下後、現在のような姿となりました（図 1）。当初、原爆ドームは戦争の辛い記憶を呼び起こすとして、取り壊しの危機に瀕していました。しかし、1960 年代に保存運動が国内で起こり、保存がなされます。1990 年代には世界遺産登録推進運動を経て世界遺産登録がなされ、世界規模での保存が完成したのです。こうして保存活動に一定の区切りを迎えた原爆ドームを今後は我々が継承し続けていく番だと言えるでしょう。そこで、いざ原爆ドームの平和を継承すると言っても、一体どのような平和を継承すれば良いのでしょうか。核兵器廃絶の達成は当然含み得るでしょう。ただ、核兵器廃絶や戦争反対だけでしょうか。我々が継承すべき平和とは何かを今一度確認すべく調査いたしました。

■ ガルトゥング平和学と原爆ドーム

まず、原爆ドームが一体いかなる性質を有した平和のシンボルであ

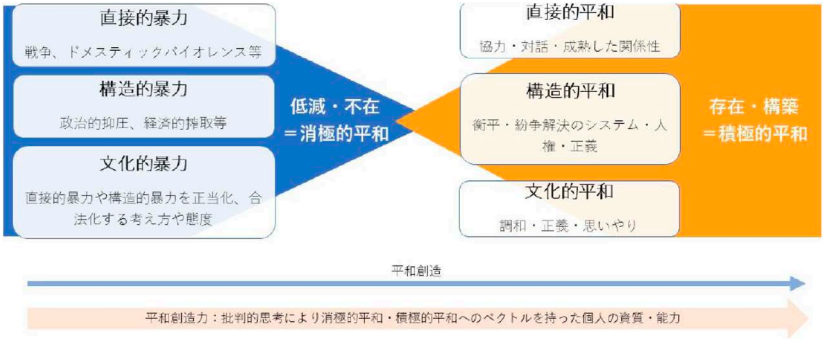


図２　ガルトゥングの提唱した平和学の概念図（高部氏の作成）
（出典）高部優子「日本における平和創造力を涵養する積極的平和教育の構築――平和教育実践者と紛争解決支援者の視点から」『横浜国立大学甲第2229号』、2021年、p.30

るのかを明確にするにあたり、平和とは何か考えます。今回、ヨハン・ガルトゥングという方が提唱された平和学の概念を軸に考えていきました。この方は、日本にも訪れておりますし、平和の概念として広島市も引用しているため、私の卒業論文でも彼の平和学に頼りました。

平和の中でも「文化的平和」に注目しました（図2）。簡単に言うと、ガルトゥングは、「平和を暴力が無い、または少ない状態」だと定義しておりまして、これを踏まえれば「文化的平和」は直接的暴力や構造的暴力を正当化や容認しない考え方と言えるかと思います。直接的暴力や構造的暴力の発生を許さないという点で、高次の平和ではないでしょうか。この点に焦点を当て、原爆ドームには「文化的平和」のシンボル性を有していたと言えるか迫っていきます。

■ 原爆ドームの保存に込めた思い

原爆ドームの保存史の中で大きな動きがある1960年代と1990年代に注目していきます。最初の保存運動において大きな役割を果たしたのが、楮山ヒロ子さんの日記です。彼女は1960年4月5日、急性白血病により16歳の若さで亡くなります。1959年3月8日から1960年3

月31日までを記した『あの日私は』という日記が遺されていました(図3)。この日記を読んで感銘を受けたのが河本一郎という方で、広島「折鶴の会」の世話人をしていました。やがて彼は「折鶴の会」のメンバーと共に原爆ドーム保存のために署名と募金活動を行うに至ったのです。

図3　楮山ヒロ子の日記(楮山国人・楮山キミ子寄贈/広島平和記念資料館所蔵)

日記を読むと、1959年8月6日には、原爆や原爆ドームについて以下のような記述がなされています。「あの痛々しい産業奨励館(原爆ドーム)だけがいつまでも恐るべき原爆を後世に訴えてくれるだろう。」という文言が見えます。原爆ドームを保存することの意義として人々に核兵器の恐ろしさを訴えかけてくれるものだと考えていたことが分かります。原爆の脅威、恐ろしさ、核兵器の否定に留まらず、恐怖を訴えることで人々に戦争を行ってはいけないという思いが忘れ去られることなく訴えてくれるのだという考えが読み取れるかと思います。

詳しい説明は割愛しますが、1990年代には、原爆ドームを世界遺産にする動きが活発化します。「原爆ドームの世界遺産化をすすめる会」は世界遺産登録に向けた「100万名署名運動」を行います。この際のビラから、戦争を容認してはならないという文言(「人類史上初めての原子爆弾による生々しい惨禍を永く後世に伝え、核戦争への警鐘を鳴らし、核兵器の廃絶と世界の恒久平和を訴え続ける永遠のシンボルとして普遍的価値をもっています。」)が見て取れます。

■ アンケート調査

これまで見てきた「文化的平和」のシンボルである原爆ドームというまなざしは現代においても当てはまり得るのか。2020年代を生きる方々にアンケート調査を実施しました。Googleフォームという、いわゆるインターネット上でアンケートをとる形式で合計145名に回答してもらいました。また、このアンケートは国際文化学部研究調査倫理委員会と何回もメールでやり取りをし、やっとのことで（実施の）承認を得ることができました。これは後で聞いた話ですが、当初、委員会は紙でのアンケートを想定していたらしく、電子形式でのアンケートに懐疑的だったようです。私の友人もLINEやInstagramでGoogleフォームのURLを共有してアンケートを実施していることが多かったので普通のことだと思っていました。そこを佐々木先生のご尽力もあり、近年は電子上でもアンケートはあるのですよ、と説得していただいた結果、承認していただけたということです。あの時は、本当にありがとうございました。今回は数ある質問の中から１つに絞って、ご説明いたします。

これは、「どのような平和を原爆ドームは訴えていると思いますか。」という質問に対して各項目の中から3つ選択していただいたアンケートの結果になります。これら（選択肢）の項目を選択すると、先ほど挙げた3つの平和に該当するようになっています（図4）。

上の3つ（「戦争反対」「原爆反対」「核兵器廃絶」）は、直接的平和に関わります。全て全体の約80%の回答を得ており、原爆ドームは直接的平和を有しているという認識があることが分かります。

続いて、真ん中の3つ（「貧困反対」「差別や偏見反対」「抑圧反対」）は、構造的平和に関わります。これらは全体的に少ない回答数であるものの、構造的平和をイメージするという人も一定数いることが伺えます。

さらに、「戦争や核兵器の容認反対」「差別や偏見への容認反対」「暴

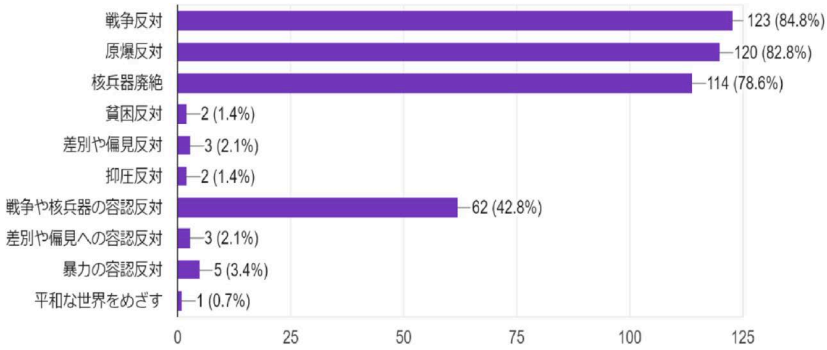


図４ 「どのような平和を原爆ドームは訴えていると思いますか。」という質問に対して各項目の中から３つ選択したアンケート結果

力の容認反対」という 3 つの項目は、文化的平和に当たります。原爆ドームに対して直接的平和のシンボルというイメージが皆の中には共有されていることが改めて証明できたのですが、「戦争や核兵器の容認反対」は全体の 42.8%と 4 番目に多いのです。他の項目を見ても構造的平和と比べて、件数は多いため、原爆ドームは「文化的平和」のシンボルであると考える者が一定数存在していると窺い知ることができました。

■ おわりに

以上、原爆ドームの有する平和とは何かを探ってまいりました。人々が戦争や原爆といった暴力のない平和を願い、原爆ドームに託しており、直接的平和のシンボルであることは前提の上で、直接的平和のシンボルに留まらない点を明らかにしてきました。原爆ドームの保存史上の重要な時期である 1960 年代と 1990 年代に焦点を当て、「文化的平和」のシンボルである可能性に触れました。楮山ヒロ子さんの日記からは、原爆ドームは悲惨な戦争を再び起こしてはならない、後世の人々に訴えてくれる平和の存在だと考えていたことが読み取れるわけです。その「文化的平和」のシンボルというまなざしは、広島「折

鶴の会」や原爆ドームを保存しようと活動した人々にまで受け継がれていきました。1990年代になり、「すすめる会」が原爆ドームを世界遺産に登録しようと動いた際でも、原爆ドームが文化的平和のシンボルだというまなざしは見えました。ここで見られた原爆ドームへの思いは、多くの人に同調され、最終的に日本だけではなく世界にも共有されたと考えられることでしょう。こうした原爆ドームへのまなざしは2020年代においてもアンケートから確かめることができました。原爆ドームが戦争や核兵器といった暴力の正当化を否定する存在だと捉えている様子を踏まえても、原爆ドームは「文化的平和」のシンボルだと言えるのでしょう。そして、我々が継承する平和もまた「文化的平和」を含めた平和だと考えられるのではないでしょうか。

ここまで、学部ゼミで学んだことの集大成として制作した卒業論文を発表しました。現在は大学院で、今泉裕美子先生の下で帝国主義について勉強しております。特に、1925年の中国上海で発生した五卅運動に興味があるので、日本の紡績会社やイギリスと中国の学生が対立した様子を追っています。学部で学んできたことや、卒業論文において原爆ドームの世界遺産化の過程などを調べる中で得た知識をもとに、異文化間の理解や交流により成立する「国際文化」というものを理解できたのではないかと思います。この経験は確実に大学院での研究に繋がっているものだと感じています。本日の発表は、今後の研究を進めるためにも学部での学びを今一度思い返すきっかけとなりました。このような機会をいただけましたことに心から感謝の意を表し、今回の発表を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

SAでの経験が卒業後に与える影響について

井上　早央梨

プロフィール：2012年3月法政大学国際文化学部卒業。SA留学はスペイン・バルセロナへ渡航し、卒業後はスペインの大学院へ進学、現在は旅行会社にて勤務。

■ 学部生時代の経験

大学在学中のSA留学ではスペイン・バルセロナに渡航し、2009年の秋から約5か月間現地に滞在しました。

留学先では、観光客の宿泊も受け入れている寮に住んでいたため、様々な国・地域から来た人々と交流する機会がありました。バルセロナは観光客の多い人気の都市ですが、ヨーロッパの中でもスリが多い地域のため、通学中にもしばしば警察の介入するような事件を見かけることがあります。寮生活の中でも、日本では考えられないようなトラブルが何度か起こり、その解決のためにまだ学び始めて一年と少しのスペイン語を使って、寮の管理人やスペイン人の学生たちとコミュニケーションを重ねました。

こうした経験を通じて、スペイン語の運用能力が向上しただけでなく、異文化適応力や問題解決能力が培われたと感じています。

留学から帰国後、3年生からは田澤耕教授のゼミに所属しました。ゼミでスペイン語圏に対する理解を深めていく中で、卒業後に再度スペインで学びたいとの思いが強まり、結果としてスペインの大学院への進学を決意しました。

海外の大学院進学には高額な費用がかかるというイメージが一般的にありますが、実際には当時年間20万円程度の費用であったため、アルバイトを通して渡航資金を確保できる点も進学を決意した要因の一つとなりました。

■ スペインの大学院での経験

2012年の春に法政大学を卒業後、同年の秋からスペイン国内の大学院のスペイン・ラテンアメリカ史研究科に進学をしました。

かつてのSA留学とは異なり、外国人留学生ではなくスペイン語ネイティブの学生たちに囲まれて学ぶ環境は非常に厳しく、言語面のみならず歴史観の違いを理解することにも大きな困難を感じました。

在籍中にブラジル史研究の教授からのサポートを受けたことがきっかけで、修士論文ではブラジルの日系移民の歴史をテーマにすることに決定しました。この研究では、日本語およびポルトガル語の文献を参照しつつ、スペイン語で論文を執筆するという少々複雑な作業を行いましたが、最終的には無事にコースを修了することができました。

■ ブラジルでの研究プロジェクト参加

修士課程修了後、大学院の教授からブラジルで行われる研究プロジェクトへの参加を勧められ、博士課程に進学しました。実際にブラジルに赴くと、現地の大学が長期に渡ってストライキを実施しており、予定していた研究が実施できないという困難な状況に直面しました。

研究室や資料館など、大学の敷地には立ち入ることができなかったため、代わりに日系移民に関連する地域でのフィールドワークとして、日系人の方々と共にお酒を飲みながら日系移民の壮絶な歴史についてのお話を聞くなど、貴重な経験を積むことができました。

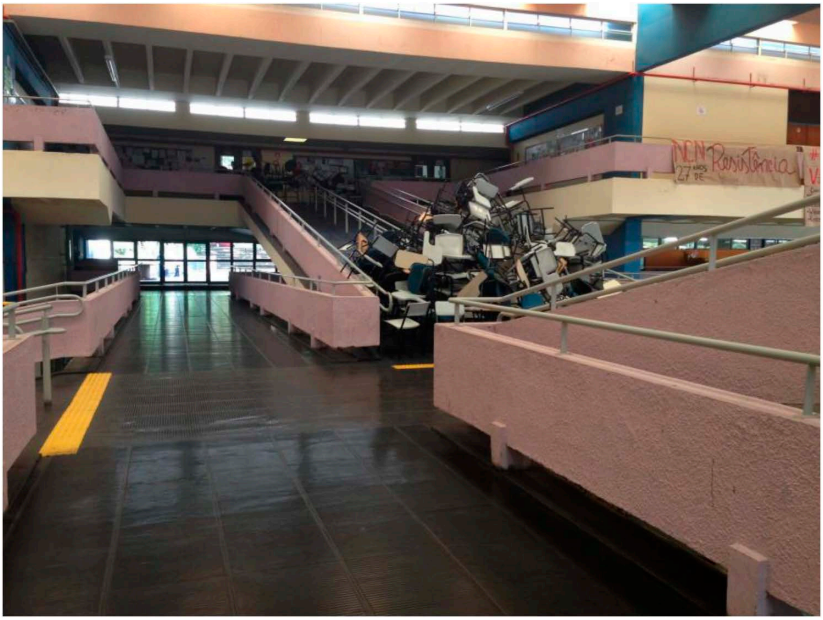


図 1　ブラジルの大学のストライキの様子。椅子でバリケードが作られている

■ 学生時代の経験を活かした社会人生活

諸事情により博士課程を中退後、日本国内の旅行会社に就職しました。私の担当業務はスペインやラテンアメリカから日本への訪日旅行の営業で、現地の旅行会社と連携して日本行きのツアーを販売しております。業務の多くはスペイン語でのコミュニケーションを要し、ツアーの手配や営業資料の作成を行います。

海外出張では、スペインやラテンアメリカで現地の旅行関係者とネットワークを構築し、日本の観光地を広める活動を行いました。さらに、実際に日本に訪れた旅行者のグループに同行し、ツアーの調整やトラブルシューティングを担当することもあります。

最近では、スペイン語圏のみならず英語圏などの取引先を持つこともありますが、普段からラテン文化に慣れ親しんでいると、他国との

やり取りが非常にスムーズに感じられます。ラテンの人々との時折ドタバタとした交渉も、次第にそれが独特の魅力となり、悩みながらも楽しく取り組んでいます。

■ おわりに

私がこれまでに経験した数々の困難は、スペイン・バルセロナでの留学生活におけるトラブルから得た教訓や問題解決能力によって乗り越えることができたと感じています。異文化環境における柔軟な対応力や言語能力の向上は、現在の職業においても大いに役立っています。学生の皆さんがこの学部での活動を通してそれぞれの人生の糧になるような経験を積むことができるよう願っております。

学部創設 25 周年を祝して（卒業生を代表して）

木下　真吾

プロフィール：国際文化学部第 1 期卒業生（2003 年卒）。SA 先はオーストラリア（モナッシュ大学）。現在、学部同窓会幹事（会長）を担っている。

国際文化学部同窓会幹事として卒業生を代表し、本日は学部創設 25 周年の祝辞を述べさせていただくとともに、法政大学国際文化学部を卒業し社会に出て感じたこと、思ったことなど、学生生活の思い出とともに徒然なるままにお話ししたいと思います。

学部創設 25 周年、人間で例えるならば 25 歳はもう立派な社会人になったわけで、1 歳から 4 歳児まで一緒に過ごした私にとっては、つい最近までとても真新しい学部のように思えていましたが、25 年もの実績と信頼を積み重ね、歴とした学部へと進化されてきたこと、卒業生の一人として自分ごとのように思い、本当に胸一杯の気持ちです。それでも 60 歳から 100 歳を超えるような法学部、工学部（現、理工学部）、経営学部といった長い長い歴史を持つ学部に比べれば、まだまだ若いフレッシュな学部であり、若い感性とその柔軟性で VUCA と言われるこの時代に即した、更なる学部の進化・発展を祈念したいと思います。

私は、法政大学第一中高等学校（現在の法政大学中学高等学校）の

附属校の出身であり、国際文化学部の一期生でもあるということで、根っからの法政っ子です。「法政愛は誰にも負けない」とまで言えるレベルではありませんが、普通の卒業生よりは人一倍、法政愛が深いと思っています。青とオレンジの縞模様を見るとなんだか愛着を感じるし、どこかで「オレンジの会」と聞くと、なんだか嬉しくなります。話は逸れますが、自分の子供は是非法政の附属校に、と考えてはいますが、昨今の中学受験の過熱化の影響もあり入学は困難を極めるものです。現代の小学生の受験勉強はとても大変で、小学生には伸び伸びとした生活もさせてあげたい親心もあり、最近の悩みのタネとなっています。結果は数年後の本人の気持ち・気合と、その結果に委ねることとしたいと思います。

さて、国際文化学部が創設された1999年より少し前の1990年代初頭に時代を遡りたいと思います。1990年代初頭の象徴と言えば「バブル崩壊」です。いわゆる日本の失われた30年の初期フェーズです。こんな日本経済が大変なとき、バブルの余韻にふけることもなく、何も知らない男子高生は部活動（ラグビー）で忙しい青春時代を過ごしていました。

当時、インターネットが普及し始め、マイクロソフトがWindows95を発売し、急速にPCが普及し始めた時代でした。通信手段も一家に一台の固定電話から、ポケベル、PHS、携帯電話が徐々に普及し始めていた時でした。当時の男子高生は、初めて持ち運べる電話と、キーボードで文字を入力できる箱型の装置を手にし、その新たなテクノロジーに圧倒されつつ、その便利さに感動し、ひどく没頭したものです。今では当たり前となっているグローバル化も、この頃から日本でも少しずつではありますが進展していった時期であると記憶しています。

高校三年生の夏は普通であれば受験勉強で大変な時期ですが、私は附属校生だったので受験とは無縁でした。部活動のラグビーに青春時代を注ぐことができたわけで、当時の吉祥寺の校舎から少し離れた土

のグラウンドで、泥と汗にまみれて青春時代を謳歌しました。そんな日々を送っていましたが、中間試験・期末試験の試験期間に入ると部活は自主練習中心になるので、一応勉強（厳密には試験対策）をしていました。そんな自身の行動を振り返ってみても、我ながらちゃんとしておいて良かったと思っています。

高校3年生の秋口ぐらいだったか記憶が定かではありませんが、学部の志望を出せる時期（志望する学部に関する調書、アンケートみたいなものを書く時）が来ました。その時、私は「国際文化情報学部（学部創設時には国際文化学部となった）」という新しい学部ができると初めて知ったのです。グローバル化・国際化という言葉をニュースで耳にするようになっていましたが、この学部は「国際社会人」を育成するために、言語・文化、異文化コミュニケーションやマルチメディア・インターネットなどの情報科目も学べるという、全く新しい分野の学部というわけです。先に述べたように当時の時代背景を踏まえると、本当に真新しい、革新的、斬新なコンセプトであったと記憶しています。新しいもの好きの私にとって、第一志望は迷うことなく「国際文化学部」の一択でした。結果は、大正解でした。

国際文化学部は市ヶ谷校舎、外濠に面する好立地にあります。しかし、吉祥寺の雑多な商店街を抜けて閑静な住宅街にある学校に中学・高校の6年間、通いつめた若者にとって、市ヶ谷という土地はなんだか無機質で刺激の少ない、物足りない街であるなという気持ちを抱きながら通学したものです。春になると外濠の桜が満開になり、その見事な景色をボアソナード・タワーの高層階から眺めたものです。そんな桜並木の余韻に耽る時間は早々に、同級生たちと一緒に授業を受けながら放課後はカフェテリアでダラダラと過ごす時間が大学生の自分にとっては至極楽しい時間でした。何しろ中学高校と男子高だったわけですから。

楽しい大学生活を過ごしているうちに、2年生時のSA先を選択す

る時が来ました。当時の私にとって、志望学部を選んでから人生2回目の選択です。SA先は第一言語、第二言語圏から選択できます。英語圏はアメリカ・イギリスをはじめ多くの国が選べるし、第二言語圏も中国、韓国、ロシア、ドイツ、スペインなどアジア・ヨーロッパ各国を選択可能という、これだけ選択肢が与えられるというのは、当時の大学・学部関係者の方々の尽力のおかげであり本当に頭が下がる思いです。そんな努力もつゆ知らず、学部生達はワクワク・ドキドキしながらSA先を選ぶのでした。

私は、第一言語の英語圏のオーストラリア（モナッシュ大学）を選択することにしました。オーストラリア訛りの英語を心配する人もいましたが、そんなことより、ラグビーが盛んな南半球にいけることが大変魅力的でした。個人で行く留学と、大学のプログラムとして団体で行く留学にはそれぞれメリット・デメリットがあると思いますが、SAというプログラムは非常にメリットが多いと思います。現地で大変な経験や思いをすることもありますが、現地で近くに日本人の仲間がいることの安心感や、団体で活動できるという面白みがあります。

2年生になって世界各地に飛び立つわけですが、当時インターネットがまだ普及しはじめたばかりだったので、通信手段といえばまだまだ国際電話が主流の時代でした。そんな時代に、皆頑張ってインターネットを繋ぎチャットや掲示板（BBS）で、世界各国の仲間と情報交換とコミュニケーションをとったものです。やはり、当時は、アメリカに留学していたメンバーの通信環境が一番充実していたようですが、その他の国では通信手段確保に苦労することが多かったです。実際、私もオーストラリアで画像のやりとりを沢山しすぎたせいか、通信費がかさんでホストマザーにひどく叱られたことがありました。

また、団体で行くわけですから、現地の人達との交流や文化情報発信を目的に、異国の地で“あえて”日本ならではのイベントを企画し実行に移しました。例えば成人式。2年生時に二十歳を迎える人が多

く日本の成人式には参加できないことから、オーストラリアのビーチで成人式も行いました。オーストリアの整髪店に行くことを恐れていた私は、この頃には髪が酷くボサボサになっていたので、これを機に綺麗さっぱりしようということで、ビーチでの成人式に参加してくれた仲間に1人ずつ断髪していただく儀式も執り行いました。一生の思い出です。また、南半球は季節が逆ですので、いわゆる日本的なイベントではありませんが、真夏のビーチでクリスマスを過ごすこともできました。

モナッシュ大学には、Monash Japanese Clubという日本文化を楽しむ部活動があることをSA前に知ったので、私は当時の代表とeメールでpen pal（今では死語となっているが文通相手）を募りました。そこに賛同するメンバーを中心に、現地で日本の食材を調達しJapanese BBQも企画して現地の人達を招き、食文化の異文化体験と現地の人との交流を深めることもできました。オーストラリアでは日本の焼肉で使うような焼肉用の薄切り肉はなかなか見つからず苦労しましたが、それもいい思い出です。私の当時のpen palは今でも大の親友であり誕生日にはお祝いメッセージを毎年送るし、それぞれの結婚式にはお祝い動画を送りあいました。このような経験は、当然個人の留学でも実現可能ですが、団体・組織的なプログラムの方がよりやりやすいのではないかと個人的には思います。

時を、現在に戻したいと思います。現在は、グローバル化が進みすぎて「経済安全保障」やら「ブロック経済化」などグローバル化の弊害も出始めています。一社会人としては、こう言った状況に色々と対応して行かなければならない訳ですが、ここでまさに国際文化学部で経験してきた様々な「異文化体験」というものが生きてきます。

これはわたしに限らず、国際文化学部のほとんどの卒業生が社会で実感していることだと勝手ながら想像しています。グローバル化の影響もあってダイバーシティ・多様性への対応というのが求められてい

ますが、同質化しやすい日本社会にずっといて、何か自分の実体験に基づくものがないと、本当の意味でのダイバーシティ・多様性の理解は難しいと思っています。その意味で、10代後半から20代前半のこの多感な時期に、SAという形で、海外に出て異国の地で生活、勉強し、様々な人と出会い、交流を深め、多くの「異文化体験」ができるというのは本当に貴重な経験であり、一生の宝物になると思います。

昭和の体育会的な部活動・会社の職場で育ってきた私が、令和のこの時代にマネージャのポジションになり、様々な人種・バックグラウンドを持つ部下やチームメンバーを相手にするわけですが、SAでの原体験がこれらのチーム・担当でのコミュニケーションに生きてきます。これは“言語”で話が通じる、というだけの話では無いと思います。

最後に同窓会の話をしたいと思います。国際文化学部が素晴らしい学部であることはもう十分に伝わったと思いますが、同窓会としても学部の更なる成長・発展に向けて学部とともに同じ道を歩んで行きたいと考えています。そのために、卒業生間のつながりや、在校生や教授とのつながりも大事にしていきたいと思っています。ところが、学部創立25周年ですので、1期生である私も社会に出てまだ20数年ですし、我々卒業生も皆働き盛り、子育て真っ盛り、夢と青春に向かって邁進、兎にも角にも本当に忙しい毎日を送っています。

なので、同窓会と言ってもピンとこない卒業生が多いのが実態だし、活動もまだまだ活性化できていません。定期的な活動もなかなか難しく、せめてもの母校への恩返しとして、学部生を対象とした就職活動の支援は、細々とではあるが長年継続しています。一期生として長らく同窓会幹事を仰せつかっていますが、このような状況にはいささか申し訳ない気持ちで一杯です。

こういった組織・活動を下支えしてくれているのも、学部の教授や事務の方々の暖かいご支援のおかげです。教授・学部事務の学部関係者の方々に改めて感謝の意を述べたいと思います。国際文化学部は、

創設当時から学生と一緒に学部を作っていくという雰囲気がありましたし、卒業後も同窓会を通じてそれを感じています。そのDNAというか、文化・風土は今でも継承されていると信じています。このDNAを同窓会としても大切にしていきたいと考えます。

徒然なるままに色々とお話させて頂きましたが、社会人、ことさらビジネスパーソンである私にとって、タイムマネジメントは非常に重要ですので、このぐらいで締め括りたいと思います。結論、国際文化学部は創設当初から先見の明のある革新的な学部であったと確信しており、25周年を迎えた今でもそのDNAは受け継がれていると確信しています。それは多くの卒業生が社会に出て、グローバル化した経済・社会活動に従事し、様々な研究・創作活動に勤しむ中で、国際文化学部で学び経験したことが活かされているからです。

今後、世の中の変化スピードはさらに加速化しており、我々社会人にとっても、自分たちが所属する業界・業種、会社、組織のこの先が明確に見通せない状況にあります。そんな中でも、この国際文化学部が「異文化コミュニケーション」を軸に真の国際社会人を育成し、世に多くの優秀な卒業生を多く送り出してくれることを今後も期待し、同窓会として最大限のバックアップをして行きたいと思います。次の創設50年の時にはどのような進化・発展を遂げているか楽しみにしてその時を待つことにします。

学部創設25周年本当におめでとうございます。国際文化学部の更なる発展を願って。

全体講評と国際高校の取り組みに関して

神保　マオ

プロフィール：法政大学国際高等学校教諭：同校国際部副主任、国際化推進担当を歴任。高校での海外研修、姉妹校提携、または、留学プログラムの推進などを行っている。

講評

こんにちは。今回、国際文化学部のシンポジウムにお招きいただき、ここまでの取り組みについて知ることができとても嬉しく思います。ここまでのお話を聞く中で、私自身初めて聞くお話ばかりでとても勉強になることが多かったと思っております。

まず初めに、国際文化学部がSAプログラムを始めるにあたり、黎明期にどのような苦労やチャレンジがありそれを乗り越えてきたのかについて、当時の教員や担当職員の方からのお話を聞きましたが、手探りで一つ一つプログラムを発展なされてきたことに驚かされました。20年以上にわたってプログラムを続けるなかで6,000名を超える留学生を輩出してきたとのこと、ただただ驚かされるばかりです。そして、そのような多くの留学生がどのような道を留学後にたどっていくのか、留学が1人の人間の人生に与える影響に関して調査を行う、という構想についてもお聞きしました。こういった取り組みは、SAプログラムの意義について再考し、またこれまでの留学生とこれからの国際文化学部をつなげることにもなるのだろう、と思いながら先生方のお話を聞かせていただきました。

また留学プログラムに関する課題に関することでは、現在の円安やインフレに伴う留学費用の高騰についてもお話をおうかがいいたしました。国際高校でも生徒を毎年10人程度北欧スウェーデンに研修として連れて行っておりますが、2019年当時は2週間で30万円程度だった研修が、現在はその倍の費用がかかるようになりました。留学経費の高騰が留学する生徒の減少につながることを本校でも危惧しております。このような大きな課題がある中で、国際文化学部が今後のSAプログラムをどのように持続可能な形で継続していくのかを、今後もぜひ参考にさせていただければと思います。

また、留学を経験された国際文化学部の現役学生の発表もとても興味深く拝聴させていただきました。留学を経験された方からの発表では留学先での授業のことや、現地での生活などを通して、どのようなことを学び現在の自分の成長につなげてきたのか、ご自身の言葉でいきいきと語られている様子がとても頼もしく感じられました。このような体験談を語る場があることが、これから国際文化学部に進学する本校の生徒たちにとっても、留学するためのとても良いモチベーションになることと思います。

本校でも国際交流の一環として様々な国から短期や長期で留学生を受け入れております。本年度も1月に本校の姉妹校のスウェーデン・クララ高校から生徒たちが来日した際には、本校の茶道部に協力をしてもらい茶道体験を留学生とクララ高校の教員が行いました。また本校での授業を、国際高校の生徒と一緒に受け交流を深めることができました。

また、3月には本校から10名程度がスウェーデンを訪問しました。現地では、クララ高校の生徒たちと雪山に散策にでかけ、現地の野外自然博物館に行き、昔のスウェーデン人の暮らしを体験したり、FIKA（スウェーデンのカフェ休憩文化）を定期的に行い、現地の生徒と友情をはぐくむことができました。実際に現地に行って初めてわか

る現地での暮らしや文化を体験できることは、何事にも代えがたい体験だと思います。他にも本校ではPBL（プロジェクトベースドラーニング）と称しまして、昨年度はカンボジアに生徒と訪れ、現地の社会課題を解決するためにフィールドワークを行いながら、課題解決に向けて自分たちができることについて学ぶことができました。そのほかにも様々な留学プログラムを行っておりますが、今回ご紹介いただいたような、国際文化でのプログラムから多くのことをこれからも学ぶことができればと思っております。国際文化学部がこれからもさらなる発展を続けていくことを、心より楽しみにしております。

以上で私からの講評とさせていただきます。今回、このような貴重な節目のシンポジウムにお招きいただき、誠にありがとうございました。

法政大学
国際文化学部

学部創設25周年記念シンポジウム

国際文化学部は、2024年に創設25周年を迎えました。これを記念し、以下のとおりシンポジウムを開催いたします。皆様のご参加をお待ちしております。

開催日時：

2024年9月22日（日）13:00～16:30

開催場所：

スカイホール（市ケ谷キャンパス ボアソナード・タワー26階）

参加方法：要事前予約

右のQRコードよりお申込みください。

第1部
- 開会挨拶
- 国際文化学部のこれまでとこれから
  1. 学部創設時を振り返って
  2. 国際文化学部のこれまでとこれからを考える

第2部
- 国際文化学部での学び -在学生と卒業生の活躍-
  1. 在学生の取り組み
  2. 卒業生の活躍

第3部
- 同窓会活動の紹介およびシンポジウム講評
  1. 国際文化学部同窓会について
  2. シンポジウム講評
- 閉会挨拶

アクセス

法政大学市ケ谷キャンパスへ行き方はこちらからご確認ください。

特設サイト

シンポジウム開催に関する特設サイトはこちらからご確認ください。

プログラム案内

開会挨拶

第1部　国際文化学部のこれまでとこれから

1. 学部創設時を振り返って
   ファシリテーター：高柳俊男（国際文化学部教授）
   パネリスト　：川村湊（初代学部長）
   持田理子（初代国際文化学部SA担当職員）
   桐谷多恵子（国際文化学部1期生、現・多摩大学グローバルスタディーズ学部専任講師）

2. 国際文化学部のこれまでとこれからを考える
   ① 10周年以降の学部の軌跡および今後について：松本悟（国際文化学部教授）
   ② SA（スタディ・アブロード）プログラムについて　：渡辺昭太（国際文化学部准教授）
   ③ 留学生の受け入れとSJ（スタディ・ジャパン）プログラムについて　：高柳俊男（国際文化学部教授）
   ④ 海外FS（フィールドスクール）について　：稲垣立男（国際文化学部教授）
   ⑤ 国際文化情報学会の活動について　：林志津江（国際文化学部教授）

休憩（10分）

第2部　国際文化学部での学び －在学生と卒業生の活躍－

1. 在学生の取り組み
   ① SAプログラムを通じた学び　：吉永優嘉（4年生：SAシェフィールド大学）
   ：小西和佳（4年生：SA上海外国語大学）
   ② SJプログラムを通じた学び　：呂彤琳（4年生）
   ③ 海外FSを通じた学び　：吉村常葉（4年生）
   ④ 学部での研究活動　：上山みく（4年生：松本ゼミ）
   ：蓑原光（2024年3月国際文化学部卒。現・大学院国際文化研究科研修生）

2. 卒業生の活躍
   井上早央梨（旅行会社勤務）

休憩（10分）

第3部　同窓会活動の紹介およびシンポジウム講評

1. 国際文化学部同窓会について（木下真吾：国際文化学部同窓会長）
2. シンポジウム講評（神保マオ：法政大学国際高等学校外国語科（英語）教諭、国際部副主任）

閉会挨拶

シンポジウムの様子

【シンポジウム会場】

ボアソナードタワー26階スカイホール

ステージ

【開会挨拶】

開会挨拶：稲垣立男学部長

司会：渡辺昭太（学部創設 25 周年関連事業委員長）

【第１部　国際文化学部のこれまでとこれから】

座談会「学部創設時を振り返って」

髙柳俊男（ファシリテーター）

川村湊（初代学部長）

持田理子（初代 SA 担当職員）

桐谷多恵子（国際文化学部 1 期生）

座談会の様子

松本悟（10周年以降の学部の軌跡および今後について）

渡辺昭太（SA（スタディ・アブロード）プログラムについて）

髙柳俊男（留学生の受け入れと SJ（スタディ・ジャパン）プログラムについて）

稲垣立男（海外 FS（フィールド・スクール）について）

林志津江（国際文化情報学会の活動について）

会場の様子

【第 2 部　国際文化学部での学び―在学生と卒業生の活躍―】

吉永優嘉（4 年生、SA シェフィールド／SA プログラムを通じた学び）

小西和佳（4 年生、SA 中国／SA プログラムを通じた学び）

呂彤琳（4年生／SJプログラムを通じた学び）

吉村常葉（4年生／海外FS（フィールド・スクール）を通じた学び）

上山みく（4年生／学部での研究活動）

蓮原光（大学院国際文化研究科研修生／学部での研究活動）

井上早央梨（卒業生の活躍）

会場の様子

【第 3 部　同窓会活動の紹介およびシンポジウム講評】

木下真吾（同窓会会長／国際文化学部同窓会について）

神保マオ（法政大学国際高等学校外国語科教諭／シンポジウム講評）

【閉会挨拶】

閉会挨拶：石森大知教授会主任

会場の様子

第2部

付録

国際文化学部のあゆみ（2010年度～2024年度）

2010年度	➢ SJ国内研修（スタディ・ジャパン・プログラム）のプレ研修を実施（1回目）。 ➢ 外国人留学生入試を開始。 ➢ 9月卒業を導入。
2011年度	➢ 外国人留学生入試による第1期生が入学。 ➢ 東日本大震災による授業開始遅延にともない、新入生向けチュートリアル特別プログラムを実施。 ➢ SJ国内研修のプレ研修を実施（2回目）。 ➢ ザンクトガレン大学（スイス）にSA先を変更（SAドイツ）。 ➢ 2011年度入学生より、「卒業研究」を単位化。
2012年度	➢ SJ国内研修の事前学習授業「世界とつながる地域の歴史と文化」を開講。 ➢ 第1回SJ国内研修を実施。 ➢ 学部資料室に「飯田・下伊那文庫」を設置。 ➢ ペテルブルク国立交通工科大学でのSAを開始（SAロシア）。 ➢ 国際社会人叢書1『国境を越えるヒューマニズム』を刊行。
2013年度	➢ 学部資料室に「教員おすすめ文庫」を設置。
2014年度	➢ スーパーグローバル大学（SGU）創成支援事業が文部科学省に採択される。
2015年度	➢ 国際社会人叢書2『〈境界〉を生きる思想家たち』を刊行。
2016年度	➢ 韓国外国語大学にSA先を変更（SA韓国）。 ➢ センターB方式（一般入試）を開始。
2017年度	➢ 第1回海外FS（フィールドスクール）を実施。 ➢ 諸外国語アプリケーション科目の、既修者（1～2年生）による先取り履修の開始。 ➢ ILAC200番台諸外国語科目の、既修者（1年生）による先取り履修の開始。

2018 年度	➢ 学部資料室に「SA 文庫」を設置。
2019 年度	➢ 学部創設 20 周年を迎える。 ➢ 学部 3〜4 年生を対象として、大学院科目履修制度を開始。 ➢ 夏期 SA プログラムを廃止。 ➢ ロイファナ・リューネブルク大学に SA 先を変更（SA ドイツ）。 ➢ 国際文化学部「アセスメント・ポリシー」を策定。
2020 年度	➢ 一部の演習について、履修年次をそれまでの 3〜4 年次から 2〜4 年次に拡大。 ➢ 新型コロナウイルス感染症が蔓延。オンライン授業の実施、SA プログラムの全面中止、SJ 国内研修、海外 FS の中止等、学部での活動に大きな影響が出る。 ➢ SA 代替・補完措置を実施（「外国語技能検定試験等を用いた単位認定制度」、「科目配当年次の拡大」）。 ➢ 国際文化情報学会をオンラインで開催。
2021 年度	➢ 新型コロナウイルス感染症の蔓延により、SA プログラムを全面中止とし、SJ 国内研修も中止となる。 ➢ SA 代替・補完措置を実施（「外国語技能検定試験等を用いた単位認定制度」、「春学期臨時増コマ「SA（基礎）Ⅰ・Ⅱ」開講」、「秋学期臨時授業「SA（専攻）Ⅱ」開講」、「グローバル教育センター主催の短期語学研修を活用した SA 単位認定制度」、「科目配当年次の拡大」、「海外 FS（表象文化コース）」）。 ➢ 国際文化情報学会をオンラインで開催。 ➢ 海外 FS（表象文化コース）を学内（フィリピン在住講師等によるオンライン授業）で実施。
2022 年度	➢ SA 実施可否判断基準を満たす一部の SA 先について、SA を再開。3 年生の希望者を対象に、選択制 SA を実施。 ➢ ウクライナ情勢により、ロシアでの SA を中止。 ➢ SA 代替・補完措置を実施（「外国語技能検定試験等を用いた単位認定制度」、「春学期臨時増コマ「SA（基礎）Ⅰ・Ⅱ」開講」、「グローバル教育センター主催の短期語学研修を活用した SA 単位認定制度」、「科目配当年次の拡大」、「海外フィールドスクール（表象文化コース）」）。

2022年度	➢ SJ国内研修、期間短縮のうえで再開。 ➢ 海外FS（表象文化コース）を学内（対面＋フィリピン在住講師等によるオンライン授業）で実施。 ➢ 国際文化情報学会をオンラインで開催。 ➢ 『異文化』を電子版のみの発行とする。 ➢ 国際文化学部研究倫理委員会を設置。
2023年度	➢ 新型コロナウイルス感染症の終息に伴い、SAを全面的に再開。3年生の希望者を対象に、選択制SAを実施。 ➢ ディーキン大学にSA先を変更（オーストラリア）。 ➢ ウクライナ情勢によるロシアでのSA中止に伴い、エストニアのタリン大学にて夏期短期ロシア語研修プログラムを実施。 ➢ SA代替・補完措置を実施（「外国語技能検定試験等を用いた単位認定制度」、「春学期臨時増コマ「SA（基礎）Ⅰ・Ⅱ」開講」、「グローバル教育センター主催の短期語学研修を活用したSA単位認定制度」、「科目配当年次の拡大」）。 ➢ 「チュートリアル」を廃止し、「ラーニング・サポート制度」の活用及び個別の科目で初年次教育に関する内容を扱う形に変更。 ➢ コース制（情報文化コース、表象文化コース、言語文化コース、国際社会コース）を廃止し、科目群制（情報文化科目群、表象文化科目群、言語文化科目群、国際社会科目群）を導入。
2024年度	➢ 学部創設25周年を迎え、記念シンポジウムを開催。 ➢ ウクライナ情勢によるロシアでのSA中止に伴い、タリン大学（エストニア）でのSAを実施（SAロシア代替）。 ➢ 3年生の希望者を対象に、選択制SAを実施。 ➢ SA代替・補完措置を実施（「外国語技能検定試験等を用いた単位認定制度」、「グローバル教育センター主催の短期語学研修を活用したSA単位認定制度」）。 ➢ 3年次編入学試験を開始。 ➢ 海外FS（表象文化コース）をフィリピンで実施。

SA 先別派遣人数一覧（2010 年度～2013 年度）

国名	SA 先	2010	2011	2012	2013
イギリス	シェフィールド大学	17	21	35	29
	リーズ大学	26	13	15	25
アメリカ	UC デイヴィス校	14	16	15	16
	ミシガン州立大学	17	18	18	20
	ボストン大学	22	15	22	20
	ボストン大学［夏期］（～2016）	9	9	2	1
	UC デイヴィス校［夏期］（2017–18）				
カナダ	ヨーク大学	21	11	18	8
	トレント大学	14	3	2	4
	ブロック大学	5	18	12	17
オーストラリア	モナシュ大学（～2021）	13	14	3	10
	ディーキン大学（2023～）				
ドイツ	オルデンブルク大学（～2010）	18	25	14	16
	（スイス）ザンクトガレン大学（2011–18）				
	ロイファナ・リューネブルク大学（2019～）				
フランス	西部カトリック大学	12	19	21	20
ロシア	サンクトペテルブルク国立大学（～2018）	9	5	1	3
	ペテルブルク国立交通工科大学（2012～）	—	—	10	6
	（エストニア）タリン大学（2024～）	—	—	—	—
中国	上海外国語大学	12	24	23	18
スペイン	バルセロナ大学	19	21	18	11
韓国	延世大学校（～2015）	8	9	13	12
	韓国外国語大学（2016～）				
合計		236	241	242	236

SA 先別派遣人数一覧（2014 年度～2019 年度）

SA 先	2014	2015	2016	2017	2018	2019
シェフィールド大学	33	30	15	18	18	14
リーズ大学	19	28	16	22	26	25
UC デイヴィス校	20	22	23	25	23	10
ミシガン州立大学	18	17	17	17	18	18
ボストン大学	23	10	26	12	5	12
ボストン大学［夏期］（～2016） UC デイヴィス校［夏期］（2017–18）	6	5	6	2	2	—
ヨーク大学	19	26	23	25	25	26
トレント大学	6	14	5	15	13	14
ブロック大学	19	17	16	20	17	21
モナシュ大学（～2021） ディーキン大学（2023～）	11	19	12	24	22	23
オルデンブルク大学（～2010） （スイス）ザンクトガレン大学（2011–18） ロイファナ・リューネブルク大学（2019～）	11	13	10	16	8	12
西部カトリック大学	13	19	15	16	14	13
サンクトペテルブルク国立大学（～2018）	4	1	0	0	0	—
ペテルブルク国立交通工科大学（2012～）	3	1	7	8	7	8
（エストニア）タリン大学（2024～）	—	—	—	—	—	—
上海外国語大学	15	11	11	17	13	16
バルセロナ大学	22	21	16	19	22	18
延世大学校（～2015） 韓国外国語大学（2016～）	7	18	14	11	13	15
合計	**249**	**272**	**232**	**267**	**246**	**245**

SA 先別派遣人数一覧（2020 年度～2024 年度）

SA 先	2020	2021	2022	2023	2024
シェフィールド大学	中止	中止	11	18	29
リーズ大学	中止	中止	28	22	19
UC デイヴィス校	中止	中止	18	25	29
ミシガン州立大学	中止	中止	14	10	18
ボストン大学	中止	中止	7	9	5
ボストン大学［夏期］（～2016）	—	—	—	—	—
UC デイヴィス校［夏期］（2017–18）					
ヨーク大学	中止	中止	中止	33	27
トレント大学	中止	中止	13	30	28
ブロック大学	中止	中止	中止	26	29
モナシュ大学（～2021）	中止	中止	—	17	18
ディーキン大学（2023～）					
オルデンブルク大学（～2010）	中止	中止	13	14	11
（スイス）ザンクトガレン大学（2011–18）					
ロイファナ・リューネブルク大学（2019～）					
西部カトリック大学	中止	中止	15	21	16
サンクトペテルブルク国立大学（～2018）	—	—	—	—	—
ペテルブルク国立交通工科大学（2012～）	中止	中止	中止	中止	中止
（エストニア）タリン大学（2024～）	—	—	—	—	7
上海外国語大学	中止	中止	中止	24	19
バルセロナ大学	中止	中止	中止	17	16
延世大学校（～2015）	中止	中止	中止	35	27
韓国外国語大学（2016～）					
合計	0	0	119	301	298

国際文化学部専任教員一覧（2024年度）

氏　名	主な担当科目
粟飯原　文子	英語圏の文化III、国際関係研究III、国際社会演習
浅川　希洋志	心理学Ⅰ・Ⅱ、異文化適応論、教養ゼミⅠ（心理的ウェルビーイングを考えるA）、教養ゼミⅡ（心理的ウェルビーイングを考えるB）
井坂　政裕	入門物理学、サイエンス・ラボ
石森　大知	国家と民族、国際関係研究IV（家族と結婚の人類学）、国際社会演習、文化人類学
和泉　順子	情報システム概論、プログラミング言語基礎、ネットワーク基礎、社会とデータサイエンス、情報文化演習
稲垣　立男	表象文化演習、現代美術論、社会と美術、メディアと社会、ソーシャル・プラクティス、フィールドワークと表現、視覚デザインと文化情報
今泉　裕美子	国際関係学概論Ⅰ・Ⅱ、国際社会演習、オセアニアの政治と社会Ⅰ・Ⅱ（法学部公開科目）
岩下　弘史	英語、言語文化演習
宇治谷　義英	英語、英語圏の文化Ⅰ
内山　政春	朝鮮語、世界の言語Ⅱ、朝鮮語圏の文化Ⅱ（朝鮮語の構造）
遠藤　郁子	英語、言語文化演習
大嶋　良明	メディア情報基礎、ネットワーク基礎、コンピュータ音楽と音声情報処理、メディア表現法、情報文化演習
大中　一彌	地域協力・統合、フランス語圏の文化Ⅰ、国際文化情報学入門、国際社会演習
大西　亮	言語文化演習、SAスペイン語、スペイン語講読
大野　ロベルト	世界の中の日本語、日英翻訳論、言語文化演習、英語科目
岡村　民夫	フランス語、表象文化演習
小川　敦	ドイツ語科目、ドイツの文化と社会LA・LB、言葉と社会、国際社会演習
北　文美子	英語、英語圏の文化Ⅴ
衣笠　正晃	英語、言語文化概論、言語文化演習
甲　洋介	道具のデザイン学、仮想世界研究、道具による感覚・体験のデザイン、こころの科学、情報文化演習
グアリーニ, レティツィア	世界の中の日本文学、表象文化演習、Gender and Japanese Culture

輿石　哲哉	英語圏の文化Ⅶ、英語圏の文化Ⅷ、Structure of English、History of English、世界の言語Ⅰ、国際文化情報学入門、言語学A、言語文化演習
佐々木　直美	スペイン語、スペイン語圏の文化Ⅱ、言語文化演習
佐々木　一惠	宗教と社会、宗教社会論Ⅱ、ジェンダー論、Approaches to Transnational History、国際社会演習
佐藤　千登勢	ロシア語、ロシア語アプリケーション、ロシア・東欧の文化、言語文化演習、ロシアの文化と社会LA・LB
重定　如彦	ディジタル情報学概論、ゲーム構築論、情報アプリケーションⅠ、情報文化演習
島田　雅彦	サブカルチャー論、クリエイティブ・ライティング2、表象文化演習
島野　智之	持続可能な社会、文化と生物、文化と環境情報、国際社会演習、サイエンスラボ、自然史
鈴木　正道	French AⅠ・Ⅱ　、フランス語2・4、フランス語4Ⅰ・Ⅱ、フランスの文化と社会LA・LB、外国文学と文化LA・LB
鈴木　靖	中国の文化Ⅲ（日中文化交流史）、中国の文化Ⅸ（中国俗文学）、アジアの伝統芸能、言語文化演習
須藤　祐二	英語圏の文化Ⅳ、英語
副島　健作	異文化間コミュニケーション、言語文化演習
髙柳　俊男	朝鮮語、大学を知ろう：〈法政学〉への招待、法政学の探究LA、人の移動と国際関係Ⅱ、世界とつながる地域の歴史と文化、国際社会演習
竹内　晶子	比較表象文化論、演劇論、英語、表象文化演習、Japanese Theater
張　勝蘭	中国の文化Ⅰ（現代中国社会）、中国の文化Ⅱ（多民族社会中国）、中国語アプリケーションⅡ、人の移動と国際関係Ⅰ、国際社会演習
栩木　玲子	英語2・4
中澤　史	スポーツ総合演習、スポーツ科学、スポーツ心理学、スポーツメンタルトレーニング論
中和　彩子	英語圏の文化Ⅵ、英語
林　志津江	ドイツ語科目、ドイツ語アプリケーション、ドイツ語圏の文化、映像と文学、表象文化演習
久木　正雄	スペイン語、スペイン語圏の文化Ⅰ、宗教社会論Ⅲ
廣松　勲	フランス語科目（国文SAまたは非SA）、第三外国語としてのフランス語、フランス語の世界、フランス語圏の文化Ⅳ、北米文化論（ケベック講座）、言語文化演習

フィールド，マーク	英語圏の文化Ⅱ、英語、英語コミュニケーションⅠ～Ⅲ、英語アプリケーションⅨ
深谷　公宣	英語、表象文化演習、身体表象論
松本　悟	国際文化協力、平和学、国際関係研究Ⅰ・Ⅱ、実践社会調査法、実践国際協力、国際社会演習
森村　修	文化情報学概論、現代思想、文化情報の哲学、パフォーマンスの美学、こころとからだの現象学、情報文化演習、倫理学Ⅰ・Ⅱ
ル・ルー清野ブレンダン	フランス語5・6・8、フランス語アプリケーション①②③、フランス語圏の文化Ⅲ（歴史）、Intercultural Communication F
渡辺　昭太	中国語、中国語アプリケーションⅠ、資格中国語中級A・B、中国の文化Ⅳ（中国語の構造）、中国の文化Ⅴ（中国語と日本語）、中国語科教育法（1）～（4）

2010年度～2023年度までに退職された教員

岩川 ありさ　江村 裕文　大沢 暁　川村 湊　熊田 泰章　玄 宜青　小池 康郎
鈴木 晶　曽 士才　田澤 耕　中島 成久　PHILIPPE JORDY　保坂 嘉惠美
堀上 英紀　前川 裕　南塚 信吾　山下 誠　山根 恵子　山本 文明　山本 昌弘
リービ 英雄

歴代執行部・事務主任一覧（2010年度～2024年度）

年度	学部長	教授会主任	SA委員会担当 教授会主任	教授会 副主任	事務主任
2010	曽士才	髙柳俊男	衣笠正晃	佐々木直美	近藤恭子
2011	鈴木靖	甲洋介	衣笠正晃	佐々木直美	近藤恭子
2012	鈴木靖	甲洋介	鈴木正道	竹内晶子	近藤恭子
2013	髙柳俊男	松本悟	須藤祐二	和泉順子	島田大輔
2014	髙柳俊男	松本悟	北文美子	佐々木一惠	島田大輔
2015	栩木玲子	輿石哲哉	今泉裕美子	廣松勲	島田大輔
2016	栩木玲子	輿石哲哉	今泉裕美子	廣松勲	島田大輔
2017	大中一彌	中和彩子	中澤史	林志津江	島田大輔
2018	大中一彌	中和彩子	中澤史	林志津江	島田大輔
2019	衣笠正晃	須藤祐二	佐々木直美	井坂政裕	座波周司
2020	衣笠正晃	深谷公宣	佐々木直美	井坂政裕	萩尾亮介
2021	松本悟	深谷公宣	渡辺昭太	遠藤郁子	高野有紀
2022	松本悟	須藤祐二	渡辺昭太	遠藤郁子	高野有紀
2023	稲垣立男	須藤祐二	廣松勲	遠藤郁子	高野有紀
2024	稲垣立男	石森大知	廣松勲	グアリーニ, レティツィア	高野有紀

国際文化学部パンフレット（表紙）一覧（2010 年度～2024 年度）

2010 年度（タイトル：パズル／デザイン：清水翔子）

2011 年度（タイトル：Study in a bottle／デザイン：吉澤史織）

2012年度（タイトル：真っ青な空に自分の未来を自由に描いていく／デザイン：加藤那々実）

2013 年度（タイトル：SA HOUSE／デザイン：藪下果奈）

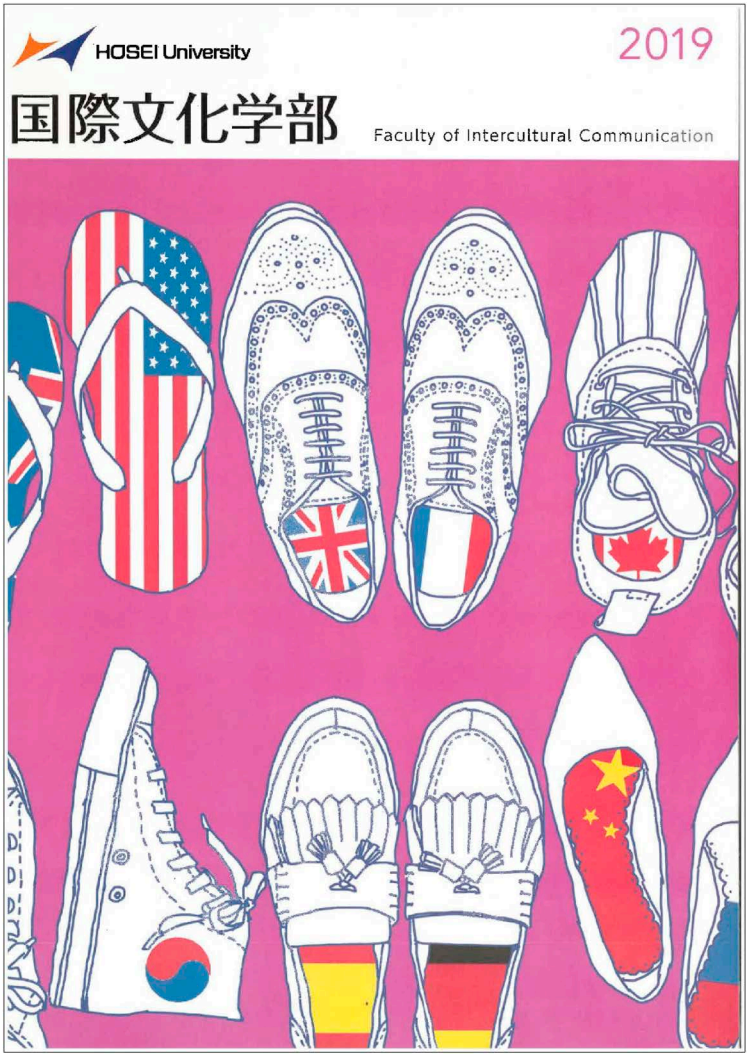
2014年度（タイトル：この一つの粒が／デザイン：堀井未央）

2015 年度（タイトル：The Intercultural Flag of the “Rising Sun” ／デザイン：仁科瀛）

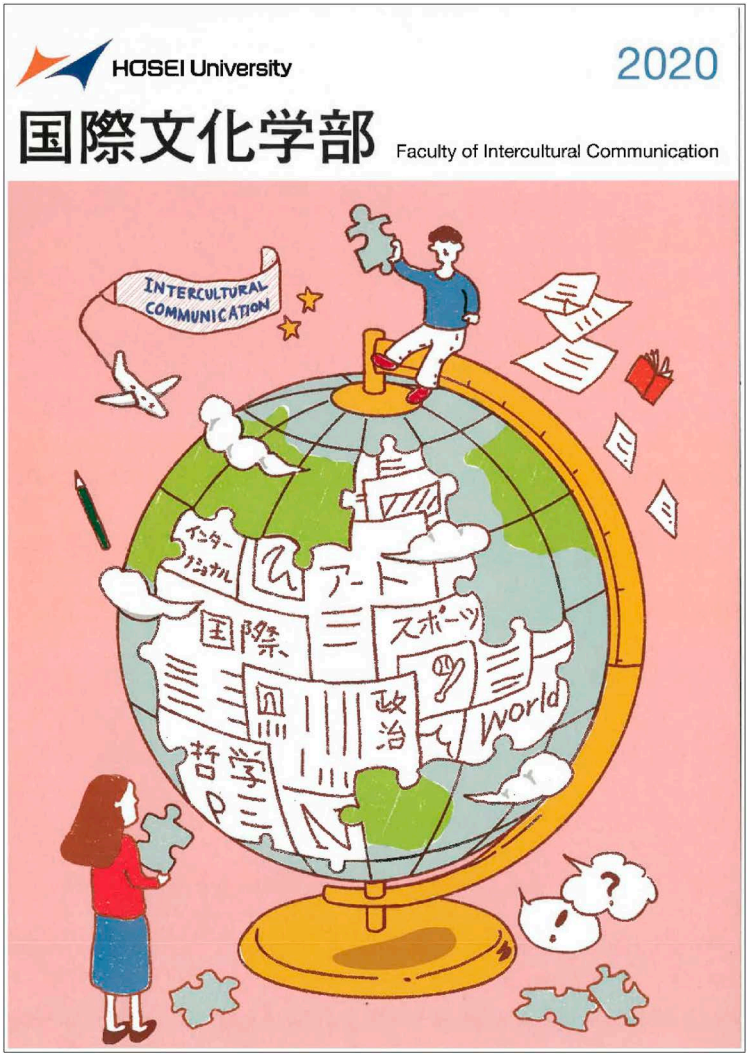
2016 年度（タイトル：語学と文化を身につけて／デザイン：小島シティマイ百那）

2017年度（タイトル：チガウトオナジ　オナジトチガウ／デザイン：宮川陸）

2018 年度（タイトル：それぞれの行く先、明るい未来／デザイン：佐和田伊吹）



2019 年度（タイトル：未来へ歩き出せ／デザイン：児島芽衣）



2020 年度（タイトル：知求（ちきゅう）／デザイン：飯高光輝）

2021 年度（タイトル：UPDATE〜新たな世界へ発射！〜／デザイン：中西智美）

2022年度（タイトル：未来を描く／デザイン：原亜由）

2023 年度（タイトル：多様性のびっくりばこ／デザイン：平野蒼衣）

2024年度（タイトル：始まりの空／デザイン：田沢茉彩）

国際社会人叢書（表紙）一覧

国際社会人叢書１で「国際社会人」として取り上げた人物：
藤野厳九郎、中西伊之助、ラフカディオ・ハーン、ハリエット・タブマン、リゴベルタ・メンチュウ、杉原千畝、アンリ・デュナン、ラザロ・ルドビコ・ザメンホフ、ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ

国際社会人叢書２で「国際社会人」として取り上げた人物：
E・H・カー、ハンナ・アーレント、オクタビオ・パス、ジャン・ルーシュ、エドゥアール・グリッサン、山口昌男、アマルティア・セン、寺山修司、ベネディクト・アンダーソン

おわりに

国際文化学部教授会主任
石森　大知

法政大学国際文化学部が創設され、四半世紀を迎えました。本誌を通してその歩みを振り返り、これまでの成果と課題、そして未来への期待を皆さまと共有できたことを光栄に思います。本学部は1999年に文化を通じた国際理解やグローバルな視野を持つ人材の育成などを使命として始まりました。その後、多様な文化や価値観の尊重と、異なる背景を持つ人びととの対話を重視した教育が受け継がれてきました。学部創設から25年という節目の本年、こうして一つの成果として本論集を発刊できることは、本学部に関わるすべての方々のご協力とご尽力の賜物です。

2024年9月22日に開催された学部創設25周年記念シンポジウムには多くの卒業生や在学生が参加し、各自の経験や学びについて語ってくださいました。それぞれの歩みは、本学部における教育が人材の成長を支えてきたことを象徴しているといえるでしょう。国際的な機関での活躍や、企業や団体でのリーダーシップを発揮する卒業生も多く、その姿は次代を担う学生たちにとって大きな励みとなっています。本学部が目指してきた教育方針および人材育成が、こうした卒業生たちの活躍を通して具現化されていることに教職員の一人として深い喜びを感じます。

私自身は2020年4月に本学部に着任しましたが、ちょうど新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るい始めた時期でした。キャンパス閉鎖やリモート授業の導入などこれまでに経験のない状況が

次々と生じ、大学教育の在り方が試される日々が続きましたが、本学部は柔軟に対応して参りました。オンライン授業やリモートでの国際交流といった新たな教育方法が急速に発展する中で、学生たちも逆境を乗り越えて成長する頼もしい姿を見せてくれました。また、近年のインフレーションや円安による留学費用の高騰、さらには国際情勢の不安定化といった外的な課題も浮上しています。こうした社会環境の変化にもかかわらず、本学部は異文化理解と国際交流に対する信念を堅持して参りました。

本学部の発展は、四半世紀にわたり学生、教職員、そして卒業生を含む支援者の皆様の努力と協力の賜物であると確信しています。教育と研究環境の向上に力を尽くしてくださったすべての方々、とくにこれまで学部の発展に寄与してくださった卒業生や教職員の皆様に、心より敬意と感謝を申し上げます。皆様の支えがなければ、ここまでの成果を達成することは不可能でした。また、この論集の発刊に際して多大なご協力をいただいた関係者の方々にも、改めて深く御礼申し上げます。皆様のご尽力により、本学部が歩んできた25年の歴史がこうして形として残り、これからも多くの方々にご覧いただけることを大変嬉しく思っています。

今後の展望として、本学部は国際的な視野をさらに広げるために、教育プログラムの充実や研究内容の発展を図って参ります。とくに国内外の多様な文化との積極的な交流を図り、地域社会や国際社会における課題解決に寄与する人材の育成とともに、持続可能な未来を見据えた教育を推進していく所存です。引き続き、皆様のご協力を賜りますよう、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

異文化　　別冊2　　学部創設25周年記念特別号

IBUNKA EXTRA NUMBER 2

Journal of Intercultural Communication

ISSN　2758-5824
2025年（令和7年）3月31日　発行

編集　学部創設25周年関連事業委員会
佐々木直美　髙柳俊男　張勝蘭　渡辺昭太
発行　法政大学国際文化学部
〒102–8160　千代田区富士見2–17–1
03–3264–9345
jkokusai@hosei.ac.jp
印刷所　株式会社国際文献社

法政大学国際文化学部

異文化

2025年3月